

大正九年四月一日發行 大正九年三月五日印刷

Z32-B88

島崎村有島生馬監修

# 金の船

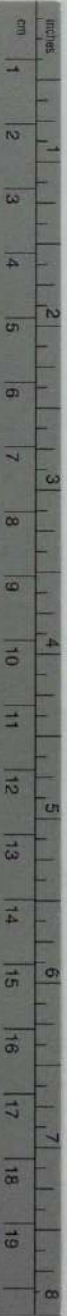
四月号



才二卷才四号

国立国  
3.  
図書館

(原画 島崎村有 大正九年三月五日)



Kodak Color Control Patches



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



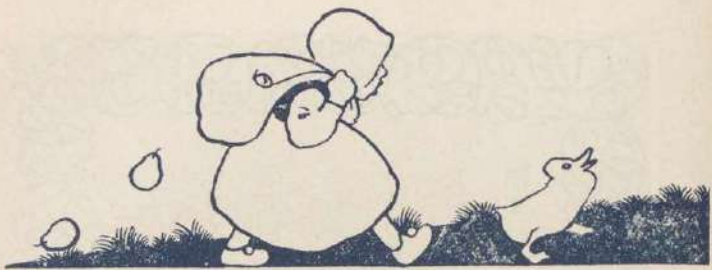






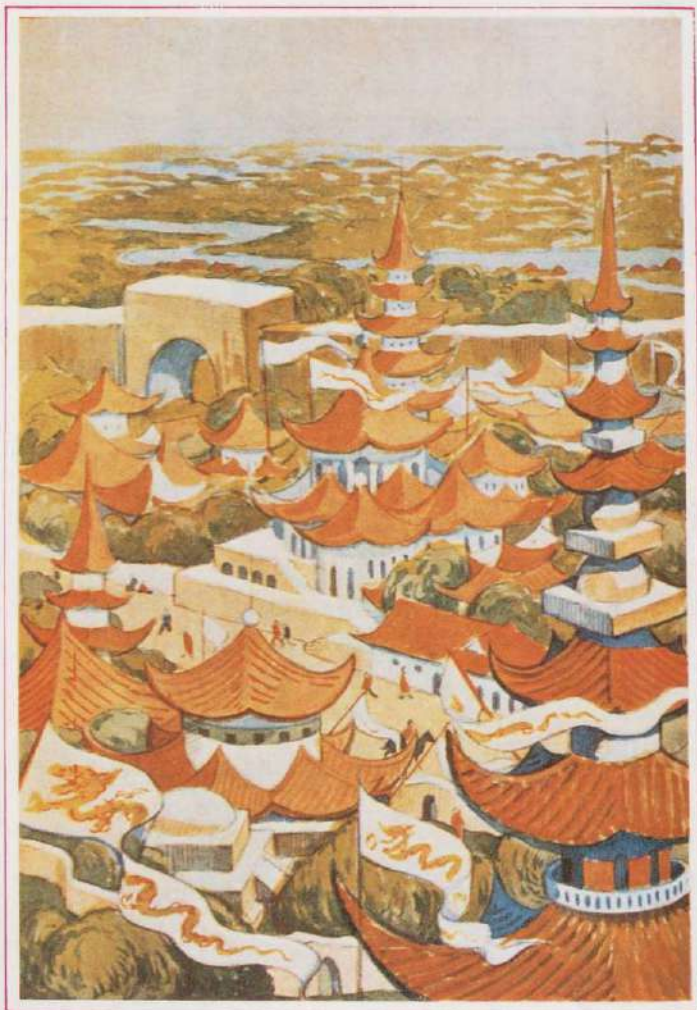
「金の船」四月號 第二卷第四號

薔薇の子(表紙、石版刷)……………岡本歸一  
 窓の中の國(日繪、三色版)……………岡本歸一  
 四丁目の犬(曲譜)……………本居長世  
 人買船(童話)……………野口雨情  
 山の中の話(童話)……………島崎藤村  
 不思議な窓(童話)……………西條八十  
 宇治川の先陣(歴史童話)……………窪田空穂  
 琴の太郎(長篇童話)……………小山内薫  
 春の日向(童話)……………若山牧水  
 腰折れ雀(童話)……………楠山正雄  
 失くなったヴァイオリン(童話)……………前田崑



瓜の舟(童話)……………安藤華子  
 山六爺さん(長篇童話)……………沖野岩三郎  
 青いボート(童話)……………徳永壽美子  
 瘦牛(童話)……………青木茂  
 狼と狐(童話)……………橘逸雄  
 雲雀の子とろ(遊戯唄)……………野口雨情  
 鬼ごっこ(童話)……………野口雨情  
 かねの音(幼年詩)……………若山牧水  
 ゆきさらさ(綴方)……………山本鼎選  
 人と馬車(自由畫)……………山本鼎選  
 第四回應募自由畫評……………山本鼎選  
 「瓜の舟」について……………西條八十  
 「金の船」主催青い鳥劇の二日間……………岡本歸一  
 挿畫……………岡本歸一  
 製版……………田中松太郎





窓の中の國

今ロンドンの町は夏の夕暮で、やうやく軒下に蝙蝠が飛び出やうかと云ふころ、家々の燈火が灯るか灯かぬかと云ふ時刻です。それなのにスラドンがこの新しい窓から見た戸外の光景は、長閑な春の白晝の光景でした。青い晴れわたつた空が何處までも遠く續き、その下に昔風な、城壁で圍まれた市街が見えました。……………「不思議な旅」(第十五頁)



四丁目の犬

作曲 本居長世  
作歌 野口雨情

一丁目の子供  
断け願  
れ  
二丁目の子供  
泣き泣き  
逃げた  
四丁目の犬は  
足長  
犬だ  
三丁目の角に  
此方  
向いて  
居たぞ

一丁目のこども

か け か け か へ れ 二丁目のこども

な き な き に げ た 四 丁 目 の

い ん は あ し な が い ん だ 三 丁 目 の

か こ に こ の び て る た ぞ





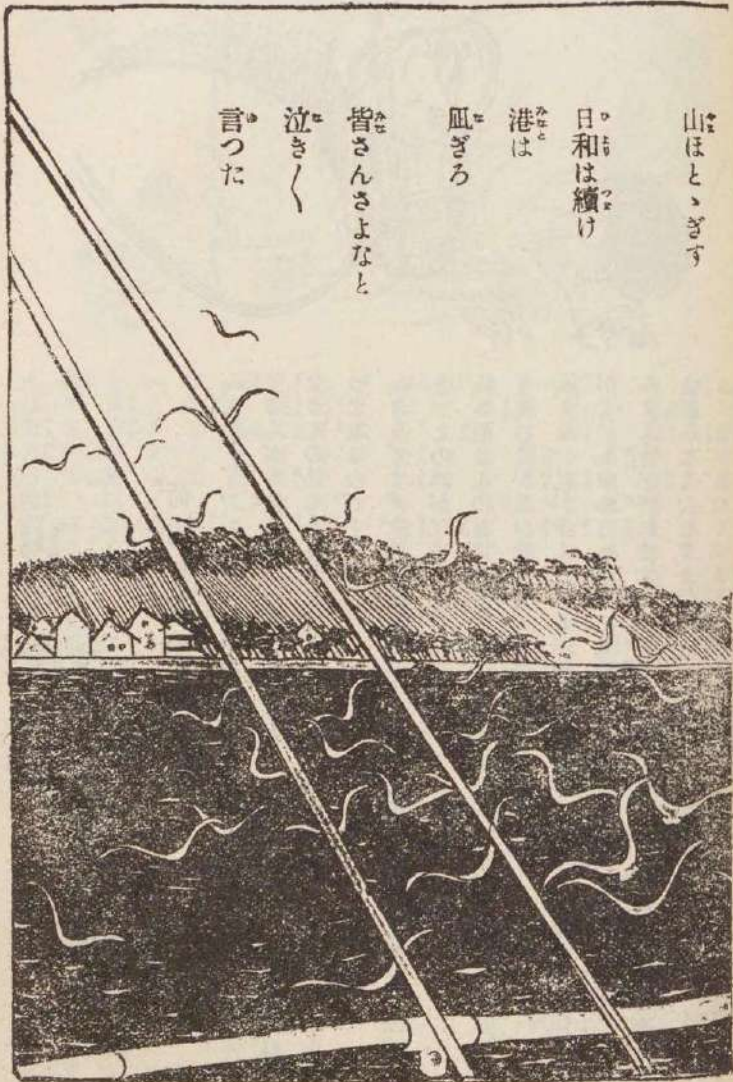
船の金

号四第卷式第



◆ てに裏台舞の劇「鳥い青」◆  
 (一踏本岡 (子重八谷水)ルチルチ 耶次佐藤齋 りよ右でのつ向)  
 (次作本山 萬壽山 横 (江野川風)ルチミ んんやち大)





山ほととぎす

日和は續け

港は

凧ざろ

皆さんさよなと

泣きく

言つた



人買船

野口雨情

人買船に

買はれて

行つた

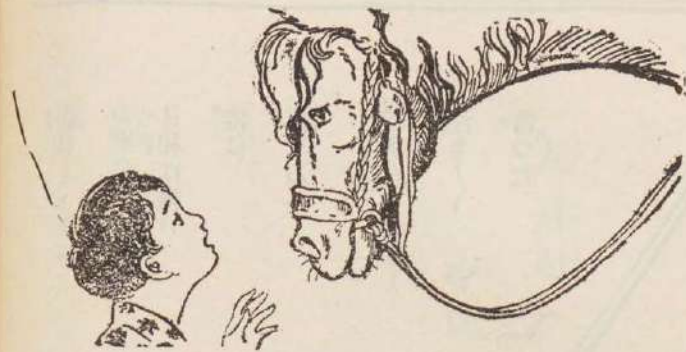
貧棒な

村の





「どうよ。どうよ。」  
と馬方が言ひますと、馬は片足づゝ盥の中へ入れます。馬の行水は薬でもつて、びつしより汗になった身体を流してやるのです。父さんは馬方の前に立つて、樂さうに行水をつかつて貰つてゐる馬を眺



「もし〜、お前さんは今歸るところですか。」  
父さんが家の門の外に出て見ますと、馬が近所の馬方に引かれて父さんの見てゐる前を通ります。この馬は夕方になると、きつと歸つて來るのです。  
「さうです。今日は荷物をつけて、隣の村まで行つて來ました。」  
と、この馬が父さんに言ひました。  
「お前さんの首には好い音のする鈴がついてゐますね。」  
と父さんが言ひますと、馬は首をよりながら、  
「え、私が歩く度にこの鈴が鳴ります。私はこの鈴の音を聞きながら、お家の方へ歸つてまゐります。馬も荷物をつけて行く時はなかく骨が折れますが、一日仕事をすまして、山道を歸つて來るのは樂みなものですよ。」  
さう馬が言つて、さも自慢さうに首についてゐる鈴を鳴して見せま

## 山の中の話

(子供に語り聞かせる父親の話の中より)

荷物を運ぶ馬

島崎藤村





山の中の田舎では、近所に玩具を賣る店もありません。村の子供は凧なども自分で造りました。父さんはまだ幼少かつたものですから、お家の爺やに手傳つて貰ひまして、雑作なく出来る凧を造りました。紙と糸とはお祖母さんが下さる、骨と竹は裏の竹藪から爺やが切つて来て呉れる、何もかもお家にある物で間に合ひまして、爺やが青い竹を細く削つて呉れますと、それに父さんが御飯粒で紙を貼りつけました。鰯のかたちの凧を造りました。みんなのするやうに、凧の尾には矢張紙を長く切つてさげました。

お前達は學校の先生から手工を習ひませう。お前達が自分で紙の箱などを造るのは、上手に出来ても出来なくつても、楽しみなものです。父さんが自分で凧を造つたのは、丁度お前達の手工の楽しみでしたよ。細い竹や紙でこしらへたものが、だん／＼凧のかたちになつて行つた時は、どんなに父さんも嬉しかつたでせう。父さんはその凧に糸目をつけまして、田圃の方へ持つて行きました。

「風よ、来い、来い、凧揚れ」



六  
めしました。そして、馬の行水の始まる時分には、山の中の村へ夕方の来ることを知りました。それに氣がついては、父さんは自分の家の方へ歸りませうと思ひました。

父さんの田舎では、夕方になると夜鷹といふ鳥が空を飛びました。その夜鷹の出る時分には、蝙蝠までと一緒に舞ひ出しました。

「蝙蝠——来い、来い。」

と言ひながら、父さんは蝙蝠と一緒に飛び歩いたものです。どうかすると狐火といふものが燃えるのも、村の夕方でした。

「御覽、狐火が燃えて居ますよ。」

と村の人に言はれて、父さんはお家の前から、そのチラ／＼と燃える青い狐火を、遠い山の向ふの方に望んだこともありました。あれは狐が松明を振るのだとも言ひましたし、奥山の木の根が腐つて光るのを狐が口にくはへて振るのだとも言ひました。父さんは子供でなんにも知りませんでした。あの青い美しい不思議な狐火を夢のやうに思ひました。父さんの生れたところは、それほど深い山の中でした。





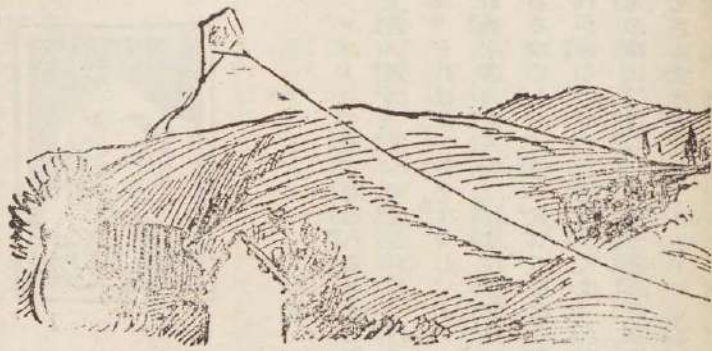
と言つて、近所の子供も手造りにした凧を揚げに来て居ます。田圃側の枯れた草の中には、木瓜の木などが顔を出して居まして、遊び廻るには楽しい場所でした。

「あ、好い凧が来ました。この凧に早く揚げて下さい。」と凧が言ひました。父さんが大急ぎで糸を出しますと、凧は左右に首を振つたり、長い紙の尾をヒラヒラさせたりしながら、さも心持よさうに揚つて行きました。

凧は空の方に居て、父さんにいろ／＼な注文をします。「あ、わたしは面食ひさうになりました。もつと糸をたぐつて下さい」と言ふ時には、父さんは凧の注文する通りに糸をたぐつてやります。今度は左の方へ傾きさうになりました、早く右の方へ糸を引いて下さいと言ふ時には、父さんはまた凧の言ふ通りに、右の方へ糸を引いてやります。そのうちに凧は風をうけて、高く高く、のして行きました。

「凧さん、よく揚りましたね。そんなに高いところへ揚つたら、そこいらがよく見えませう。」と父さんが下から尋ねますと、凧は高い空から見える谷底の話をしました。

「凧さん、何が見えます。はうばうのお家が見えますか。」  
「え、石の敷きであるお家の屋根から、竹藪まで見えます。馬籠



の村が一目に見えます、荒明の鎮守の社まで見えます。」

「お祖父さんの好きな恵那山は奈何でせう。」

「恵那山もよく見えます。もつと向ふの山も見えます。高い山がいくつも見えます。の山の向ふには、見渡すかぎり廣々とした野原がありますよ。何か光つて見える河のやうなものもあります。」

「それはきつとお隣の國です。」

父さんの生れた田舎は、美濃の方へ降りようとする峠の上にあります。したが、お家のお座敷からでも、お隣の國が山の向ふの方に見えました。極くお天氣の好い日には、遠い近江の國の伊吹山まで、かすかに見へることがあると、お祖父さんが父さんに話して呉れたこともありました。

「夕陰で、高い處から見物しました。」と、凧が言ひました。

父さんも凧を揚げたり、凧の話を聞いたりして、面白く遊びました。自分の造つた凧が、そんなによく揚つたのを見るのも楽しみました。

「凧も見物で草臥れました。もうそろ／＼降して下さい。」

と、凧が言ふものですから、父さんは糸をたぐりせすと、凧はフハフハ／＼空を舞ふやうにして、田圃のところまで嬉しうに降りて来ました。(おはし)





## 不思議な窓

西條 八十

10

ロンドンの或る會社へ勤めてゐるストラドンといふ若い男が、家への戻りがけ、妙なものを見ました。それは長い髻を生やし、ダブ／＼な見慣れぬ着物をきた老人が、往來に産を敷いて何か賣つてゐるのでした。何を賣つてゐるのかと見ると、それが妙なのです。産の上には、古ぼけた、四角な木の枠に、汚らしい硝子を嵌めた窓がひとつ置いてある丈けでした。ストラドンもこれまで往來で種種な物を買つてゐるのを見掛けましたが、窓を賣

る商人はこれが初めてでした。まはりに一杯集つてゐる人たちも、やはりストラドンと同じやうな心持でゐると見えて、皆怪訝さうな目付でデロ／＼その老人を眺めてゐるばかり、誰ひとり「一體その窓は幾何で賣るのか」と訊く者もありません。もつともその老人だとしても、別に「買つて下さい」とも云はず、黙つて窓と一緒に産の上に坐つてゐるのでした。

そのうち、何うして見付けたか、巡査が人込みを分けてやつて來ました。さうして、「コラ／＼、そんな處で物を買つては不可ん。」

と、件の老人に向つて云ひました。老人は居眠つてゐるやうなボンヤリした眼をあげて一寸巡査の顔を見ましたが、柔順に立上つて、黙つたなり、産をソロ／＼巻きはじめました。

「お前たちも亦、何で立つてゐるのか。」

と、巡査は、今度は見物人に向つて云ひ、

「サ、行け、行け。」

と、両手をあげて追ひ散しました。

ストラドンも他の見物人と一緒に巡査に追はれて一二間行きかけましたが、妙にその窓のことが氣になるので、立止まつてソツと遠くから件の老人の様子を見てゐました。

一體ストラドンは妙に物好きを男でした。さうして一つの事に氣を奪られると、それからそれへと際限なくボンヤリ考へ耽つてしまふ、云は始終夢を見てゐるやうな男でした。この時にもウツト

り何もかも忘れて老人の様子を見てゐたのです。それとも知らない老人は産を巻いてしまふと、それと商賣物の窓とを重ねて腋の下に挿込み、ソノソ歩きだしました。ストラドンはすこし離れてその後を蹤いて行きましたが、突然背後から聲をかけて老人を呼び止め、

「モン／＼、その窓は幾何で賣るんです。」

と、訊きました。

老人は振願つて、赤く爛れた兎のやうな眼で、デロリとストラドンの顔を眺め、

「ウン、この窓か、お前さんが持つてゐる丈けのお金を出せば賣つてあげるよ。」

と、返事しました。

「して、その窓はどう云ふ窓なのです。」

と、重ねて訊ねますと、老人はひづかしい顔をして、

11



「これは魔法の窓だ、わしが昔バグダッドの町で  
手に入れた。此世に二つと無い珍しい品物だ。」  
と、答へました。

「私はいま懐に二圓しきや持つて居ませんが、家  
へ歸ればもう一圓五十錢あります。それ丈けて賣  
つて呉れませんか。」

と、ストラドンが掛合ひますと、老人は一寸思案し  
てから、

「宜しい、おやあ三圓五十錢で賣りませう。」  
と承知しました。

そこでストラドンは、窓を抱へた老人と連立つて  
自分の下宿へと戻つてきました。併し途々いろいろ  
考へ直してみますと、自分があんまり物好きな  
のに呆れてしまひました。

こんな古ぼけた、得體も知れない窓を三圓五十  
錢で買つて、一體どうするんだらう、それに自分

た。さうして今にも鐵鑊の音がするかと、それと  
なく室の物音に閉耳を立てゝゐましたが、何故か  
内部はヒツツ、閉として、老人の咳拂ひとつ  
聞えませんでした。

二

五分ばかりすると、老人は室の扉を開けて出  
て來ました。さうして  
ニヤニヤ笑ひながら、  
「すつかり取付けまし  
たよ。入つてご覧なさい。  
窓の景色はそれは  
綺麗だから。」  
と云つて、



「これは、ご機嫌よう。」  
と、挨拶したなり、何處へか立去つてしまひまし  
た。  
ストラドンは其後一度も  
この奇妙な老人の姿を町  
に見かけませんでした。  
また老人に渡した三圓五  
十錢のお金が、何處をど  
う、誰の手へ渡つて世界  
を廻つて行つたか、知り  
様も有りませんでした。  
イヤ、これは後のお断り  
で……。  
さて、ストラドンは老人

「もう仕方が無い」と、ストラドンは断念めて、老  
人を二階の、煤けた自分の室へと案内しました。  
さうして卓子の抽斗から、残りの一圓五十錢を出  
して支拂ふと、老人は件の窓を下にぶろして、  
「ではこれを取付けてあげますから、暫く室外へ  
出てゐて下さい。これは秘密にやらなければなら  
んのだから。」と云ひました。

ストラドンは云はれた通りに室を出て階段の中途  
で煙草をよかしながら窓の附くの待つてゐまし

の後姿を見送つてから、急いで室へ入つてみると  
なるほど窓はキツチリ壁に取付けて在りました。





ストラドンは着てゐたフロック、コートを抜いて釘に掛けながら、何となく嬉しくて堪らないやうな気がしました。

今までストラドンの室には窓なんか一つも無く、室中の道具としては、たゞ隅の壁の處に小さな押入れが在るだけでした。老人はその押入れの處に窓を取付けて行つたと見えて、押入れの中に在つた行

く横き、その下に昔風な、城壁で囲まれた市街が見えてゐました。高色の瓦や、白壁が日にかゞやき、その向ふには燃えるやうに緑いろの野や島があり、コバルト色の河が帯のやうにそれを繞つて悠々流れてゐました。ずつと街を取捲いた高い石壁の出口出口は、槍を持つて番兵が固めて居り、街中の處々には高い塔が立つてゐて、それには弓を持つた武者のやうな人間が上つてあたりを眺めてゐました。

いろ／＼な荷物を積んだ車が、街の四方の出口を行つたり來たりし、柳の植つた廣い往來の真中には、一人の男が胡弓のやうなものを弾いて歌をうたつてゐました。またそれを見やうとしてか、通りの家々の格子戸の中からは、澤山の人の首が出たり引込んだりしてゐました。いかにも春のうら／＼かな日に照らされた、何の苦勞もない、長閑

李だの、茶道具だの、ウキスキイの纏だのが卓子の上に並べてありました。窓から明りが射すせいか、室の中が前よりずつと明るく賑やかになつたやうに想はれました。

ストラドンは早速その壁が一尺、横幅が二尺ほどある窓の傍へ寄つて、ソツと覗いてみました。

「オヤ」

と、彼は聲を立て、両方の眼を摩りました。それからハンケチを出して窓の硝子をよく／＼拭きました。併し見た不思議は變りませんでした。

ハテ一體これは如何した事でせう？、今ロンドンの町は夏の夕暮で、やうやく軒下に蝙蝠が飛び出やうかと云ふころ、家々の燈火が灯くか灯かぬかと云ふ時刻です。それなのにストラドンがこの新しい窓から見た戸外の光景は、長閑な春の白晝の光景でした。青い晴れたつた空が何處までも遠

な街の光景でした。

ストラドンはなほも善くこの街の附近の様子を見極めて、一體何處の國の光景だかハッキリ知らうとしましたが、遠方は一面ボツツとした霞のやうなものが立ち竝めてゐて、何が何やら少しも判明りませんでした。たゞ幾分調べる手掛りになりさうなのは、街の中に幾つとなく聳えてゐる塔の上には、どれも白地に黄金の龍を刺繍した長い旗がたなびいてゐることでした。

ああ、戸外は今ロンドンの町の夏の夕暮で、自働車の響や夕刊賣の聲が喧しく、せはしく聞えてゐますのに、この窓の中の光景の一體まあ如何したと云ふんでせう。

ストラドンは窓枠に片腕をもたせたなり、何時までも／＼飽かずこの不思議な光景に見入つてゐました。(つゞく)





# 宇治川の先陣

窪田 空穂

壽永三年の舊正月のことでした。相模の鎌倉の源頼朝の館へ、京都の後白河法皇から勅が下りました。それによると、去年信濃から起つて、北陸道を攻め上つて京都まで入り、平家の一隊を西國の方へ追ひ拂つた木曾義仲が、今は京都で、我儘亂暴の有りたけをして、法皇にまで御難儀をかけてゐる。お前の力で、義仲を討つて懲せといふ御命令でした。

畏くも法皇の勅なので、頼朝はすぐにお受けをしました。そして自分の代りに、二人の弟の範頼と義経とを大将とし、大將の太右衛門、六右衛門といふ軍勢を率ゐさせ

せて遣しました。この軍勢は東海道を上り、一軍、二軍と分れて、勢田と宇治の橋を渡つて、京都へ攻め入るといふ手筈でした。

頼朝は二匹の名馬を持つてゐました。一匹は「生食」といひ、一匹は「磨墨」といひました。「生食」といふ名は、傍にゐるものは馬でも人でもかまはずに食ひつくので附けられたので、「磨墨」といふのは、磨つた墨のやうに眞黒だといふので附けられたのでした。

軍勢が鎌倉を出発しようといふ前でした。義経の下に附いて行くことになつてゐる大將の一人の範頼は、した。大將の範よりもまさつた振ひを受けた、名將の一人だと思つたからでした。

軍勢が鎌倉を出発して幾日かたつた時でした。近江の國の大將で、今度の軍に、やはり義経の下に附いて出懸けるべき命令を受けてゐた佐々木高綱は、頼朝の館へお暇乞をしに伺ひました。頼朝は高綱に逢てやり、何う思つたか、

「お前に生食を遣らう」といひました。そして、「尤もあれは、大將の者が欲しがつたが、遣らんでおいたものだが、その所は承知してゐろ」と云ひ添へました。

高綱は有り難く頂戴しました。そして云ふには、「今度の軍には、このお馬で、必ず宇治川の先陣を致します。若し高綱が死んだとお聞きになりましたら、他人に先陣をされたのだと思召し下さいませ。又、生きてゐるとお聞きになりましたらば、先陣は高綱がしたのだと思召し下さいませ。」

さう云つて高綱は、頼朝の前を下りました。そこに居合せた大將や小名は、「何うだ、思ひ切つた言ひぐさでは

頼朝の館へ出て、

「何うぞ君の御愛馬の、生食を頂戴いたし度ございます。」と、熱心になつて願ひました。その頃は鐵砲がないので、戦といふと、両方がすぐ側まで寄つて、一騎つつで切合つたり組打ちをしたりして勝負をつけるのでした。

それで戦には良い馬は何よりも大事なものでした。景季がかういつて願つた心は、今度の軍には、君の御爲に命を棄てて戦ひます。良い馬を頂戴して、人一倍の手柄を立てゝ死にます。それでかういふ願ひをすることです、といふのは、云はなくても分つてゐることでした。

頼朝はその心持を知つてゐるので、承知しないわけにはゆきませんでした。だが承知しずし、かう云ひました。「いや、生食は遣れぬ。あれは、若し今度の軍が負けるやうなことがあると、自分が乗つて出懸けなければならんから、その代りに磨墨を遣らう。あれもなか／＼生食に負けぬ名馬だ。」

景季は、それでも非常に嬉しがりました。それは、君の御愛馬を別にすると、第一の馬を頂戴ができたからで



ないか。」と小聲で云ひ合ひました。

さて、範頼と義経の率ゐる軍勢は、駿河の浮島が

原まで来て、一と休みしました。

磨墨を頂戴したので自慢でたまらない梶原景季は、小高い所へ登つて、その下を通る軍馬と、自分のと見較べながら見物しました。来るは、来るは、それは何萬とも知らない程の多くの軍馬です。それぞれ、思ひ思ひの鞍を置いて、小物に曳かせたのが、列をつくつて来るが、しかし何の馬を見ても、自分の磨墨にかなふやうなのは一匹も見あたらない、嬉しいことだと思つて、續けて見物してゐますと、その中に一匹、生食ではないかと思はれるのが見えて来ました。それは立派な鞍を置いてありました。そして小者が大勢で口を取つてゐるの



ですが、それでも始末が附かないらしく、勿ねくり廻つて居ました。

一八

景季はその馬の側へ寄つて行き、急ぎ込んだ調子で小者に、

「これは誰の馬だ。」

と訊きますと、小者は、

「佐々木殿の御馬でございます。」と答へました。

「佐々木殿といふのは、三郎殿のことか四郎殿のことか。」

「四郎殿の御馬でございます。」

さう云つて小者は、その馬を挽いて通り過ぎてしまひました。

「奇態な事だ。」

と景季は獨りごとを云ひました。

「同じ家來のこの景季を佐々木に見替へられたかと思ふと残念だ。今度京都へ上つたら、木曾殿の四天王だと云はれてゐる今井、樋口、藤、根井と組

打をして死なうか、それとも西國へ歸つて、武家の名高い大將と戦つて死なうかと思つてゐるが、君がさうしたお心では、それもつまらぬ事だ。かまふものか、ここで佐々木の來るのを待ち受けて、組合つて刺違へて死んでいゝ侍を二人死なし、鎌倉殿に損をさせて呉れよう。」

正直で、一國な景季は、かう獨りごとを云つて待つてゐると、そんな事があらうとも知らない高綱は、馬に乗つてやつて來ました。景季は、並んで組附かうか、突き當つて落してやらうかと思つたが、とにかくと思つて、言葉を懸けました。

「佐々木殿、生食をいただいて來たのだらうな。」

さう云はれて高綱は、心の中で、あゝ、この人も頂戴を願つて、かなはなかつたといふ話だ。怒つてゐるらしい。と思つたので、態と言葉をやはらけて、

「いや、それについては話があります。今度の戦で手前がかうして上つて参りましたが、多分數田も宇治も橋ははづして了つてありませう。乗つて河を渡る程の馬は無い。生食を頂戴したいと思つて見ようか、とも思つて

見たが、あなたが懸はれてさへ御前しがなかつたと聞いたので、まして高綱などが願つて見たところで、戴けるわけがない。まゝよ、後々何のやうなお咎めがあらうとも構ふものかと思つて、明日立つといふ前の晩に小者と相談して、あれ程御秘藏の生食を盗んで來たのです。何うです、梶原殿。」

この話で景季は、機嫌がなほつて、

「さうか、さういふ譯なら、景季が盗むのだつたものを、飛んだことをしてしまつた。あははは。」

笑ひながらに景季は、そこを立ち去つてしまひました。

鎌倉の軍勢は、尾張の國で二手に分れました。一方は三萬五千騎、範頼が率ゐて、近江路を通つて勢田に向ふ、一方は二萬五千騎、義経が率ゐて、伊賀路を通つて、宇治橋の橋詰へ押寄せました。

義仲の方は、勢田へも宇治へも軍勢を出して、河の向うに待ち構へてゐました。宇治へ來てゐる軍勢は五百騎ばかりでした。此所で察した通りに、橋ははづしてしまつてありました。そればかりではなく、河の底には杖を

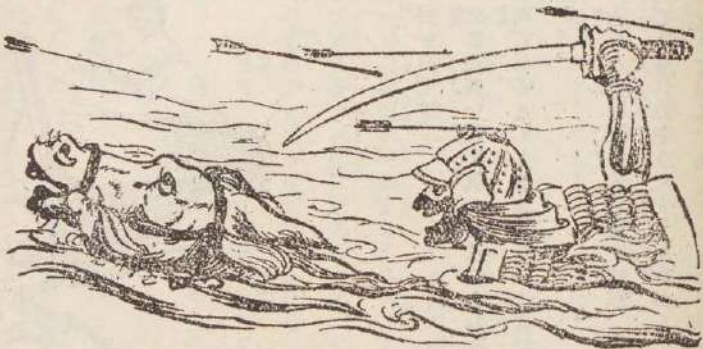


打つて綱を張り、水の上には椋木を綱で繋いで流しなどして、渡れないやうにしてあります。それにその頃は、ちやうど雪解けの頃で、比良の山、志賀の山など、琵琶湖を圍んでゐる山々の雪が解けて、湖水の水嵩が増し、それが流れ落ちて来るので、宇治川は白波が夥しく立ち瀬の音は高く鳴つて、水の勢も非常に急でした。

戦を始めようとするその朝は、河霧が深く立つてゐて身方の馬の毛色も、鎧の色も分らない程でした。大將の義経は、河岸へ出て、流水の様子を眺めてゐましたが、身方の者の心を勵すつもりと見えて、慇懃と反對のことを云つて相談をしました。

「何うだ、淀の方へ廻つて行くか。それとも河内路の方へ廻つて行くか。それとも又、水の流るのを待つことにするか。何うしたものだ。」

さういふと、二十一歳の畠山重忠が進み出て、「この河の事は、鎌倉に居た時から知れきつて居ります。俄に出来た河だといふではなし、何の思案があるものですか。近江の湖水の水が落ちて来るのだから、待つたか



さつと河に飛び入りました。

「景季はだまされたと思つたと見え、これも續いて河に飛び入りました。」

「佐々木殿、高名をしようとして、しくじりなされるな。水の中には大綱がありませぬ。氣を附なさい。高綱は成程と思つたか刀を抜いて、馬の脚に綱がから

らとて減る氣づかひはありません。橋を架けられる者もないでせう。さういふ事ならば、この重忠が、唯今瀬踏みをしてお目に懸かせよう。」

重忠はさう云つて、自分の率ゐてゐた五百騎ばかりの者を連れて渡らうとして、馬を河岸に並べ初めました。その時、橘の小島が崎から、武者が二騎、軍勢を後にして河に向つてひた駈けに駈けて來ました。

一騎は、梶原景季、一騎は佐々木高綱でした。餘所目には何事も無いやうに見えましたが、互に、心では、我こそ先陣をと思つてゐるのでせう。

景季の方は高綱よりもやゝ先になつてゐました。高綱は後から、

「梶原殿、この河は西國第一の大河ですぞ、氣をお附けなさい。あ、馬の腹帯がゆるんでゐる、しつかりお締りなさい。」

さうかも知れないと思つたと見えて、景季は、持つてゐた手綱を棄て、左右の綱を踏みひろけて、馬の腹帯を締めました。其間に高綱は、突と景季を抜いてしまつて、

むたびに、ぶつり／＼と打ち切り、打ち切りして進みました。

宇治川の流は早い、高綱の持つてゐる馬は、先食といふ日本一の馬です。流れを直直に、すつと横切つて向うの、敵のゐる岸へ登りました。景季の馬は、流れの中程まで來ると、流され氣味になつて、すつと下の方へ行つて岸へ登りました。

岸へ登つた高綱は、鎧を踏んで馬の上で立ち上つて、大音をあけて、

「宇多天皇九代の後胤、近江の國の住人、佐佐木三郎義の四男、佐佐木四郎高綱、宇治川の先陣。」と、その頃の武士のすることになつてゐた名乗を挙げました。

その時は、重忠の五百騎ばかりの者も河へ飛込んで渡つてゐました。向う岸の敵から放つ矢で、重忠の持つてゐる馬は額を射られて倒れると、重忠は弓を杖にして流れの中へ下り、兜へかぶつて來る波にも負けず、しまひには水の底を潜り潜りして渡つて居ました。

(長篇歴史童話のうち「宇治川の先陣」をばり)





# 琴の太郎

小山内 薫

—  
好い月です。

大きな高い波が眞つ白な齒をひき出して、山でも岡でも呑んでしまふぞといふ風に押し寄せて來ます。

大きな唸りを立てて來た波が、岸へぶつかると思つても崩れたやうな大きな音がして、白い霧が月に光りながら、あたりへばつと散ります。

つしより濡れたのも気がつかずは、一心に何か聞きとれてゐるのです。

碎けた波がす——つと引いて、少しあたりが静になつたかと思ふと、不思議にも、この荒い海の遠くの沖の方から、琴の音が聞こえて來るのです。

耳を澄まして聞きますと、波に乗つて來るその琴の音は、どうしても人が魔の海と呼んでゐる遠い沖の方にある岩の上から起つて來るやうに思はれるのです。ですが、その音色はとても里では聞かれないやうな好い音色で、どうしても魔の岩などといふ恐ろしい所から聞こえて來るやうな音色ではないのです。

太郎は唯うつとりとして聞いてゐました。そして、きつとあの岩の上には人の知らない琴の名人があるのだと思ひました。さう



すうつと波が引くと、その黒い暗い水が、魔者の口のやうな淵になつて、その物凄さと言つたらありません。

里を遠く離れた岬の上ですから、人の氣はひもしません。澄み切つた秋の空には黒い雲のかたまりが、そこそこにもく／＼動いてゐて、時々月を包んでは、そこらを眞つ暗にしてみせます。

太郎は脇差の柄に手を置きながら、この岬の岩の上に腰をふるしてゐます。そして、袴の裾のひ

駄ふと、音楽好きな太郎は、もう矢も楯もたまらなくなりました。たとひ魔の海であらうと何であらうと、人の住んでゐる所なら、行つて行かれない事はあるまい。よし、行つて、思ふさま琴を聞いて遣らうと決心をいたしました。



一度魔の海へ迷ひ込んだ船は、きつと魔に呑まれて歸つては来ないといふ、村の者の言ひ傳へも今の太郎は忘れてしまつてゐるのである。太郎は唯もう琴の音に夢中になつて、兄弟の事も両親の事も忘れてゐるのである。

太郎は急いで里へ歸りますと、海岸につないであつた小舟に乗りました。まだ十二になつたばかりの少年ではありましたが、濱邊で育つただけに舟を漕ぐ事はよく知つてゐました。

太郎の舟は大波を潜り潜り、見る間に進んで行きました。その早い事はまるで風のやうです。

魔の海へ来ると、急に海の水がどろ／＼した油のやうになりました。太郎が両手でしつかり握つてゐる櫓を照らしてゐる月の光も、死んだ者のやうな厭な色になりました。あたりはしんとして何一つ聞こえませんが、さつ／＼と聞こえてゐる琴

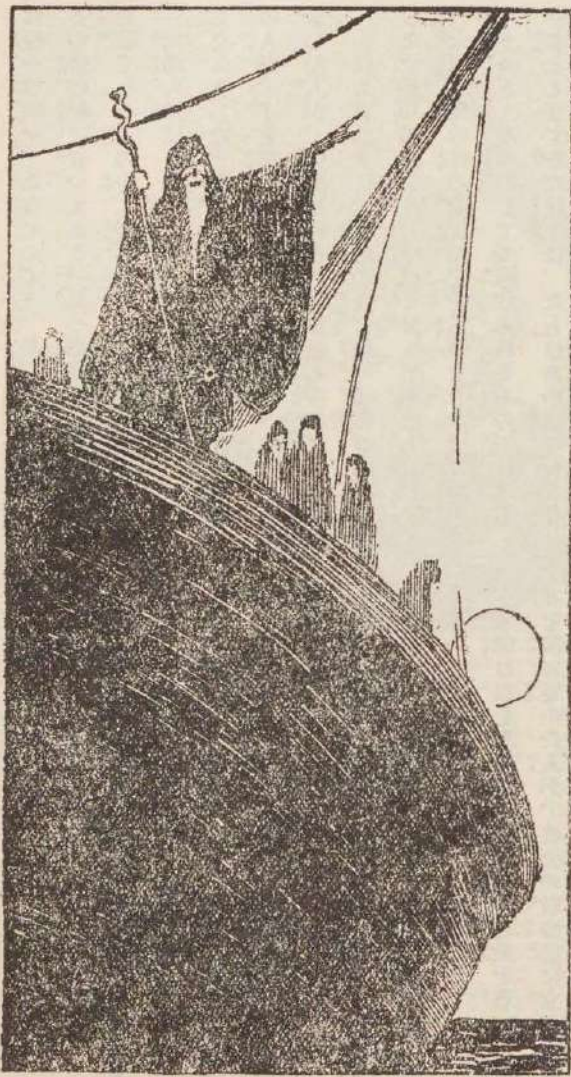
聲から、射の響くやうな、厭あな、厭あな聲が聞こえて來ました。同時に、船は又急に矢を射るやうに、島の方へ向つて進み始めました。舟は島の廻りを廻つてその裏側の方へ出ました。

の音も、ばつたり聞こえなくなつてしまひました。琴の音が聞こえなくなると同時に、今まで矢のやうに走つて來た小舟が、急に後へも前へも動かなくなつてしまひました。どんなに漕いても、どんなに押しても、重い油のやうな水は少しも舟を進めないのです。

太郎は櫓を捨てて、腕組をしてしまひました。魔の嶋は直ぐ目の前に見えてゐながら、漕ぎ寄せる事も近寄る事も出來ないのである。漕ぎ寄せる事が出來ないばかりではありません。後へ引つ返す事も出來ないのである。舟は膠が何か海の底へてもくつつけられてしまつたやうに、ちつとも動かないのです。

それでゐて、海の水は妙にうねつて來て、其立往生してゐる舟を、今にも呑んでしまひさうな様子なのです。すると、今までしんとしてゐた島の

不思議です。今日まで魔の島と呼ばれて、誰一人往來をする者もなかつたこの島の岸に、大きな見上げるやうな黒い船が一艘ついでゐるではありませんか。尤も、船は半分傾いてゐて、船の上に





は燈一つ附いてゐないので。鼻のやうな聲は、この船の軸に立つてゐる、真つ黒な衣のやうなものを着てゐる人の叫ぶ聲でした。

太郎の舟はその大きな船にびつたり吸ひついてしまひました。鼻のやうな聲を出すのを止めた軸の人が、手を高く上げますと、同じやうな黒い姿をした人が、大勢影のやうに甲板へ現れて来て、みんなも言はずに、太郎の舟に繩梯子をふるしめました。そして、それを傳つて降りて來ました。

太郎は魔の島の魔者だと思ひました。だが、もう今どんな事をして逃げられるものではなし一旦ここで來た以上は、たとひあの鼻のやうな聲を出す化物に生血を吸はれても、もう一度あの琴の音が聞きたいものだと思ひました。どうせ殺されるなら、琴の調べに酔ひながら殺されたいものだと思ひました。太郎は思ひずには、ちつと目

をつぶつて、脇差に手を掛けながら、されるやうにしてゐました。

影のやうな人達は、太郎を黒い船の甲板の上へ運び上げました。鼻のやうな聲を出した人は、影のやうな人達を退かすると、太郎の前へ出て来て海の底からでも響いて來るやうな聲で話しかけました。

「お前はどこの者だ。何しにこの恐ろしい魔の領内へはひつて來たのだ。それとも、魔の海とは知らないで來たのか。」

太郎は目を明きました。黒い着物を着て、黒い布を頭に巻いた人が、自分の目の前に立つてゐます。軸の方には、同じやうに黒い着物を着て、髪を下げにした、色の白い一人の女が、琴の前に置いて坐つてゐました。

太郎は思はず聲を立てました。

「ほう。琴があるな。あの琴の音に引き寄せられて、一曲身近で聞きたいばかりに、太郎はここへ

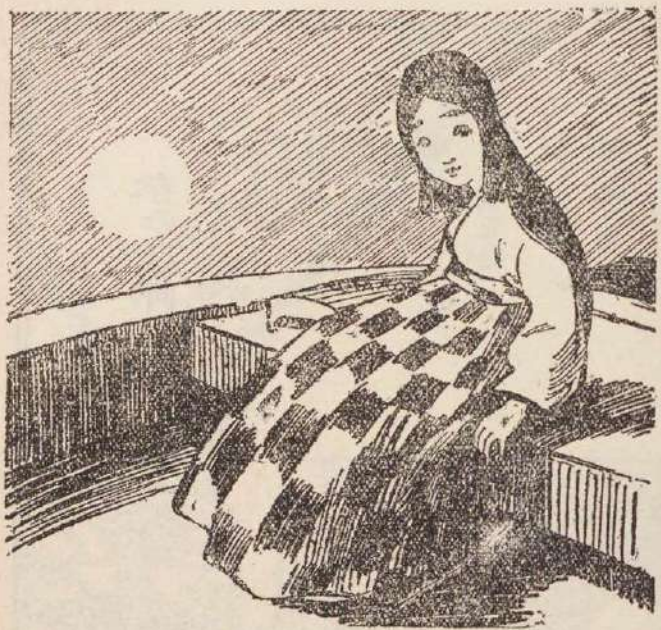
來たのです。魔の海の恐ろしい事も知つて來たのです。生血を吸れても琴が開ければ本望なのです」

「ほう、えらい執心だの。では、姫、一曲奏でてやらぬか。いたいけな小僧が命を捨てて琴を聞きに來たのだ。」

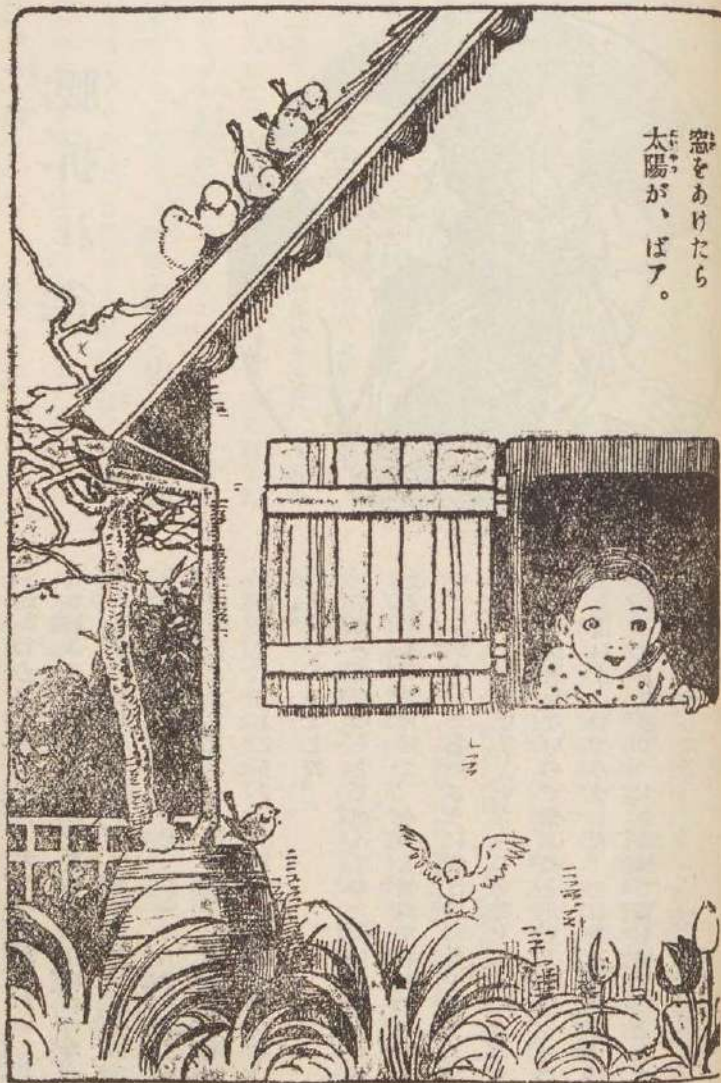
姫と呼ばれた女は、琴爪をはめて、絃に手を觸れました。忽ち波の音を消すやうにして、美しい音が流れ出しました。太郎は両手を膝に置いて、目をねむつて、聞きほれました。

曲はなんだか分かりませんが、琴の上を走る白い指と、美しい琴の音色と、透き通るやうな歌の聲とは、決して下界のものではないと太郎は思ひました。

姫は曲を終りました。でも、太郎はまだ目をつぶつて、消えて行く琴の音をどこまでも追はうとしてゐました。(つづく)







窓をあけたら  
太陽が、ばア。

春の日向

若山牧水

ちいびい ちいびい  
鳥が啼く。

ひいんこつこつ  
また別な鳥。

遠くか近くか  
柿の木か。

ちいびい ちいびい  
ひいんこつこつ ひいんこつこつ。





# 腰折れ雀

楠山正雄



ひかしく或ところに、大へん慈悲ぶかい正直なお婆さんがありました。うらゝかに晴れた春の日のことでした。お婆さんは庭に出て、草花の葉や葉裏についた小さい虫を一つ一つ丹念に取つてやつてをりますと、そこへ可愛らしい雀が一羽下りて来て、ひよこりゝ小さい足を運びながら、餌を漁つてゐました。

すると垣根のそとで遊んでゐた隣の子供がいつかこの雀を見つけて、小石を拾つて投げつけたものですから、かあいさうに雀は腰の骨を折られてひいゝゝ、ひいゝゝいぢらしい聲をして啼きながら、羽が利かないので飛ぶことができずに、地の上を這ひまはつてゐました。これを見た鳥が木の上から下りて来て、大きな嘴で雀を啄かうとして追ひまはしました。

三〇

お婆さんはこの雀子を見ると、『ちやゝ可哀さうに、どれわたしが拾つてやりませう。』

といひながらあはて、鳥を追ひ拂つて、雀の子を掌の上にひろひ上げました。雀は鳥に追つかへられたのもうすつかり弱りきつてしまつて、お婆さんの掌の上で、死んだやうになつてゐました。お婆さんははあゝ息を吹つかけて温めてやつたり、お米を細かく碎いて養つてやつたりしました。夜になると、猫や鼠のかゝらないやうに、小桶の中に入れて、大事にいたはつてやり、明る朝は起きると、お米粒の中にやはらかい菜を細かに切つて交ぜてやつたり、人間の子供のやうにして可愛がるものですから、お婆さんの息子や孫たちは、『ちやゝお婆さんはすつかりばけてしまつたんだね。雀を飼つてどうする氣だらう。』

と、悪口をいりて笑ひました。いくらみんなに笑はれても、お婆さんは平氣で、相變らず雀の正倒をよく見てやるものですから、雀もだんゝゝ元氣がついて、まだ羽は利きませんが、座敷の中をひよゝゝ飛んで歩くくらゐになりました。雀も命を助けてもらつたのが、しみゝうれしさうに、お婆さんによくなつてゐました。お婆さんもそれはゝゝもうこの雀が可愛くつてたまらないと言ふやうに、ちよいと他所へ出るのでも、

『雀を見てやつておくれ。餌をたやさないやうに氣をつけてやつておくれ。』と家の者たちにやかましく言ふものですから、家の者もその度にうるさがつて、

『お婆さんは何だつて雀なんを飼ふのだらう。』と小言を言ひますが、お婆さんは、にこゝしなながら



「だつてお前可哀さうぢやないか。」と言ふだけでした。

お婆さんの丹誠で、とう／＼雀もすつかり飛べるやうになりました。或日お婆さんは、いつものやうに雀を掌にのせたまゝ、縁側の先へ出て、「どうだらうね、もう飛べるか知ら。」と言ひますと、雀はそのまゝふら／＼と掌をはなれて空の上へ飛んで行つてしまひました。

お婆さんは、がっかりしたやうな顔をして、「あや、とう／＼飛んで行つてしまつたよ。朝晩世話をしてやつたものだから、居なくなるとさびしいねえ。でもまた還つてくるかもしれない。」と言ふと、

「お婆さんはまだあんなと言つてゐるね。」とみんなに笑はれました。

お婆さんは言つて、その種子を大事さうに、鉢の裏に入れてしまひました。

「をかしなお婆さん、雀のくはえて来た種なんぞをお實のやうにしてゐるよ。」とみんなしてまた笑ひました。

お婆さんは平氣な顔をして、

「雀の持つて来た種だから、きつといゝ實がなるに違ひない。」と言つて、種を庭へ蒔きました。

やがて秋になると、お婆さんの蒔いた種からは、ほんとに立派な瓢箪の木が生えて、蔓には数しれない、並はづれて大きな瓢箪の實が甘さうに垂れ下りました。

お婆さんは大喜びで息子や孫たちに喰べさせたり、近所の人にやつたりして、それでもまだなかなか盡きないので村中の家へ一軒々々配りました。そのうちで七つ八つ、一ばんださい實は、干して

それから毎日、お婆さんは、何かにつけて雀のことばかり言つてゐましたが、ちやうど二十日目の朝でした。お婆さんの居間の縁先で、雀がしきりに、ちい／＼言つて啼いてゐました。お婆さんは「あや／＼雀が大さう啼いてゐるねえ。家の雀が還つて来たんぢやないか。」と言ひながら出て見ると、やはりさうでした。

「まあお前よく忘れずに来てくれたぢや。」とお婆さんは言ひました。

雀はその時、何か物でも言ひたさうに、お婆さんの顔を見て、口にくはへて来た小さな種のやうなものを縁側に落してまた飛んで行きました。

お婆さんは、

「何だか雀が置いて行つたよ。」と言ひながら、傍へ寄つて見ると、白い瓢箪の種でした。

「何かわけがあつて持つて来たのだらうから。」

瓢箪にするつもりで、つるして置きました。

それから一月ほど経つて、お婆さんは、

「もう瓢箪も干いたらう。」と言つて、縁側につるして置いた瓢箪を下して見ると、先よりも大へん重くなつてゐました。

「あやどうしたのだらう。」と言ひながら、お婆さんは口を開けて見ますと、中からまつ白なおいしいさうなお米がさら／＼とこぼれ出しました。

お婆さんは、びつくりして、桶の中にお米をあけると、忽ち桶にはこぼれるほどになりました。それでもまだ瓢の中にはお米が減りませんから、今度は鹽をもつて来てあけると、見る間にこれ一杯になつてしまひました。

それからほかの瓢のいゝをみると、どれもこれもお米が口もとまでぎつしりつまつてゐて、それをほかの物にあけるとすぐと一杯こぼれて、



それで之の瓢のお米はあけるそばから殖えて行つて、いつまでたつても決して盡きるといふことがありませんでした。

それから、お婆さんの一家は日に増し、繁昌して、とう／＼村中で一ばんのお金持になつてしまひました。

するとこのお婆さんの隣の家に、もう一人、欲張りで呑ん坊のお婆さんがありました。お隣の家が日にましめさ／＼と身上のよくなるとは違つてこのお婆さんの家はいつまでも貧乏だものですから、息子や孫たちは、お婆さんを責めて、

「お隣のお婆さんをごらんない。あんなに好い運をさぶかつたぢやありませんか。家のお婆さんなんどは一生待つても、とても好い運などは向いては来ないからだめだよ。」など、言ふものですから、お婆さんはい／＼羨ましい上に、口惜しく

するとお隣のお婆さんは、まだその上にあつかましく、

「そんならその運のいい種子を一つわたしに下さう。」と言ひました。しかし雀のお婆さんは、  
「種子は雀が一つ持つて来ただけで、それは蒔いてしまつたからもうありません。お米なら分けて上げませう。」と言ひますと、



つて、口惜しくつてたまりませんでした。

或日とう／＼運のわるいお婆さんは、お隣の運のいいお婆さんの所へ出かけて行つて、

「お宅では、雀が運をはこんで持つて来たのだとか、みんな申しますが、ほんたうでございいますか。」と言ひました。

雀のお婆さんは、

「えい、えい、雀が瓢の種子を持つて来てくれたものですから。」と言つただけで、あまりくはしい話をしませんでした。

けれどもお隣のお婆さんは、いろ／＼しつこく言つて攻めるものですから、雀のお婆さんも、あまり意地わるをして隠すやうにとられてもいけなと思つて、しか／＼かう／＼いよわけて雀を助けてやつてから、好い運の向いて来た話をすつかりしました。

「お米なんかもらつてもしやうがない。」とブツブツ小言を言ひながら、それでも袋に一杯お米

をもらつてお隣のお婆さんは歸つて行きました。

それからはお隣のお婆さんは、どうかして自分も腰の骨の折れた雀を見つけて好い運を拾はうと思つて、

毎朝早く起きて裏庭へ出て見ますけれど、腰のぬけた雀などは一羽も見當りません。そのうちにち



れつたくなつて来たものですから、石を拾つてめちやくちやに、雀のひよこりく跳んで歩いてゐる中に投げつけると、澤山ゐる中ですから一羽ぐらゐ、中でもふしあはせな雀に中つて、飛べずにゐるのがあります。それをつかまへて、わざ／＼その上腰の骨をよく折つて足腰の立たないやうにして、食物をやつて置きました。

お隣のお婆さんは、

「まづ／＼これで一つ福の神をつかまへた。」と言つて喜んでゐましたが、根が欲張り婆さんのことですから、

「隣のお婆さんは、一羽の雀でもあれだけの運をさづかつたのだから、三羽も四羽もあれば、三倍四倍の運がさづかるわけだ。」とこんな欲張つたことを考へて、また裏庭に出てお米を蒔いて待つてゐると、雀がいつものやうに群つて來ました。此

さてそれからは、隣のお婆さんは毎日々々空をながめては、今日は雀が種子を持つてくるか、明日は持つて來るか、思つて待ちくたびれてゐますと、あやうど十日目の夕方、瓢の種を一つつゝ口にくはえた雀が三羽庭先へ飛んで來て、みんな種子を落して行きました。

「そりやこそ福の神が來た。」と家中大さわぎになつて、あはて、三つの種子を庭に蒔きました。

やがて半年も経たない中に、三本の瓢の木はずん／＼のびて、立派な蔓を出しましたが、どういふものか、生つた實の数は至つて僅か三本の木に七つか八つ、小さな實が垂れ下つてゐるだけでした。

それでも隣のお婆さんはほく／＼喜んで息子や孫達に向つて、

「どうだね。私にはろくな運は向かないと言つて

度もめちやくちやに、石を拾つてたび／＼ぶつけると、とう／＼前の分を合せて三羽の雀を打ち落してしまひました。

お婆さんはぞく／＼喜んで、

「まづこれだけあれば大丈夫だ。」と言つて、腰ぬけ雀を三羽桶に入れて飼つて置きました。

一月ほどたつと、雀はみんな腰が立つて、外へ出してやると、ふら／＼と飛んで行つてしまひました。お婆さんは、

「まあ／＼かうして恩をかけて置いたから安心だ」と上機嫌な顔をしてゐました。

雀のはうでは、

「ばかな鬼婆のおかげで、かたわにされて、くらゐ桶の中に一月もおしこめられて、こんなひどい目に逢ふのは始めてだ。」と思つて、腹を立てゝゐたでせう。

突つたが、これでは隣の家に負けやしない。と目慢らしく言ひました。

けれども生つた瓢の實は至つて少ないものですから、それでなくつても各坊のお婆さんは、少しでもお米を餘計にとりたゐと思つて、一つだつて取つて自分も喰べようと思しなれば、まして人には手もふれさせないやうにしました。

すると息子が、

「お母さんそれでは却つて好い運は向きませんよ。お隣のお婆さんはそれは澤山近所の人に喰べさせ自分も喰べたのがよかつたのではありませんか。」と言ふと、お婆さんもそれもさうかと思つて、ふしやらん、

「それでは一緒に喰べるから。」と言つて、家の者たちの外に、近所の人達をみんな呼び集めて、たつた一つの瓢を割つて出しました。





近所の人たちはわざわざ呼び立て、たつた一つばかりの瓢の實をどうして喰べさせるつもりだと言つて、中には見向きもせずに怒つて歸る人もありました。それでも意地のきかない人たちは何の氣もなしに一口頬ばつたばかりで、その苦しいやな味といつたらありません。その上いつまでとあつた、それは何ともいへない、むかしの氣持がのこつて、腸がちぎれるやうです。

「何といふひどいものを喰べさせたのだ。ちよいと匂ひをかいただけで、死ぬほど胸がわるい。あんまり胸がわるくつて氣が違ひさうだ。」

こんなことを口々に言ひながら、みんな寄つて来てがや／＼となり立ててゐました。しかしお婆さんの家のものもみんなそれどころでなく、苦しうに吐いたり下したりそこらを這ひまはつてゐる騒ぎです。喧嘩にもならず、ぶつ／＼言つて

近所の人たちは驚つて行きました。それから三日ぐらゐる病人になつてしまひました。

それでも欲張りのお婆さんだけは、二三日すると苦しい思ひをしたことなどは、きれいに忘れてしまつて、

「みんなあれはお米になる瓢だつたのだ。それを意地汚く喰べたから罰が中つたのだ。もう決して喰べさせることはない。」と言ひながら、残つた瓢の實をみんな釘にかけて置きました。

やがて一月ほど立つてから、隣のお婆さんは毎日待ちどほしくつてたまらないので、もういゝだらうと思つて吊して置いた瓢をみんな下して来て少しも澤山お米がとれるやうに、家中の桶をそこへ並べました。もうぞく／＼するほど嬉しいので、齒も無い口を齒莖までむき出して、一人でたたく／＼笑ひ崩れながら、瓢の口をあけて、桶の中

へ逆さにすると、どうせう、中からさら／＼と白いお米がこぼれ出すと思ひの外、蛇だの、蜂だの、蜈蚣だの、蟻だの、蛇だの、それは／＼氣味のわるい、いろ／＼な毒虫がぞろ／＼這ひ出して来て、目といはず、鼻といはず、お婆さんの身體にとつて、噛むやら刺すやら、見るもおそろしい始末になりました。お婆さんは欲の皮の突つばつた一心で夥しい毒蟲をみんなお米だと思つてうるさく顔にはひきはる蟲をかきのけながら、

「雀さん、雀さん、まあそんなにせはしなくお米をこぼさずに、ゆつくり入れて下さいよ。」

と言つてゐるうちに、七つの瓢箪から、何十四となく毒蟲が跡から跡から匂ひ出して来て、とう／＼お婆さんを刺し殺してしまひました。

ですから、むやみに人のことを羨ましがつたり無慈悲な殺生をするものではありません。(をばり)



# 失くなつた

## ヴァイオリン

前田 晁



エルジイが十になつた誕生日の晩でした。外では雨がびしょ／＼と降つて居りました。エルジイはおとうさんのクレエツン博士と二人でお祝ひの食事をしながら、楽しさうに何かと話して居りましたが、ふと思ひ出したやうに、  
「おとうさん、今日もわたし音楽のお稽古があつたの。」

さう言つて一つ溜息をついて、「ですけれど、ねえおとうさん、わたし、とてもヴァイオリンなん

か弾けさうぢやないわ。」

「いや、」と博士はにっこりしながら、「お前ぐらの年の時には、どんな望みでも捨てるものではありませんよ。」

さう博士が云つた時に、丁度表の方からヴァイオリンの音が聞えて來ました。

「ほらお聴さ。誰か往來で弾いてゐるものがある。中々上手のやうだ。」

博士は耳を澄ましたながらさう言ひ添へました。

來て、思ひ込んだやうに其の聲を見上げながら、甘へた聲を出しました。

「ねえおとうさん、あの子を此處へ入れて、わたしの誕生日のお菓子をやつてはいけませんか。外はあんなに寒くて濡れてゐるんですもの。」

博士はすぐに、にっこりして頷きました。エルジイはまだ赤ん坊の時に、おかあさんに死なれてしまつた不仕合せな子でしたから、博士はそれはそれは可愛がつて、エルジイの爲には、ぼろ／＼の子供達や宿無し汚い小猫などにも、恵んだり助けたりしてやつた事がこれまでに、もう度々ありました。で今夜も博士は急いで玄関の方へ出て行つて、そして瘦せた、ぼろ／＼のなりをしてゐる男の子を雨の中から呼び込みました。

男の子はおづ／＼しながら、でも嬉しさに、ヴァイオリンを抱へたまゝ暖い部屋の中へはいつて來ました。

「お前の音楽家を連れて來たよ。」と博士はエルジイ

エルジイは窓の所へ起つて行つて、カーテンを少し開いて、其の間からちつと晴い往來の方を眺めてゐましたが、

「あら、おとうさん、男の子よ。可愛さうに、雨に濡れながら弾いてゐるわ。」

「どうかい。ちやお錢をやりませうよ。」と博士は言ひました。「だがお聴さ、そら、マルセイユを弾いてゐる。」

と不意に、エルジイは博士のそばへ駆け戻つて





イに言ひました。「さあ、お菓子をおやり。そしてお茶もおやり。その後で弾いて貰ひませう。」  
さう言つてから、博士は男の子に向つて訊きました。

『お前の名は何といふね?』

『ルイ、ルブランです。』と男の子はフランス語で答へました。

『あや、フランス人かへ?』と博士も其のまゝフランス語をつかつて「さあお茶をおあがり。さうしてから身の上話を話してお聞かせ。」

ルイの顔は、自分の國の言葉を聞くと喜びに輝きました。そして直ちに、年は十一になること、両親は死んでしまつたこと。叔父が一年前にこのイギリスへ連れて来たことなどを熱心に話しました。往來で弾くのはいやだけれど、お金がないものだから、仕方なしにやつてゐるといふことをも明らさまに言ひました。

博士はいちからさうにそれに耳を傾けながら、

『誰に教はつたのかい?』と博士は一曲弾んでしまふと訊きました。

『誰にも教はりはしません。手ほどきはあとうさんがして呉れましたが、叔父さんには弾けないのですから。』

『ちや、わたしの代りにお稽古をするといひわ。』とエルジイは囁きました。

『ま、お待ち。』と博士はエルジイを抑へておきて、ルイに茶色々と尋ねました。ルイとルイの



ルイが飲んだり食べたりしてしまふのを待つてゐましたが、やがて、

『さあ、何でもお前に出来るものを聞かせて呉れ。』と言ひました。

『よくは弾けません。』とルイは恥かしさうに「ヴァイオリンがよくないものだから。』

さう言つて、ルイが取り上げた楽器を見ると、それは實際、ヴァイオリンとは呼ぶことの出来な

いほどにひどいがらくたでした。

『ちや、わたしので弾くといひわ。』とエルジイは言つて、其の部屋から駆け出して行きまして直ぐに、勇んで自分のヴァイオリンを持つて来ました。

ルイの目は其美しい楽器を見ると輝きました。そしてそれを嬉しさうに受取つて、やがて徐ろに弾き出しました。

所が何といふ立派な腕前でしたらう! 博士は聴いてゐるうちにすつかり感心してしまひました。

叔父とはさう遠くない所に住んで居る事が分りました。博士は、自分の所書を書いて渡して、ルイに明日の午後、叔父と一緒に来るやうにと話しました。丁度其の時、博士は用事が出来て呼ばれ



たので、其の部屋から出て行きました。後には子供達だけが残りました。

「わたしもう行かなければなりません。叔父さんが待つて居りますから。」とルイは、ヴァイオリンを残り惜しさに下に置きながら言ひました。「またこの美しいヴァイオリンを弾くことが出来ればよ」と思ひます。」

「さよ、さよ」とエルジイは、はしやいで言ひました。「それをね、今夜うちへ持つてお出でなさいよ。そしてね、明日来る時に持つて来ればいいわ。」

「でも旦那さまが怒るでせう？」

「あとうちさんが？ いゝえ」とエルジイはいくらかむつとしたやうに、「わたしの物を貸したからつて、あとうさんは怒たりなんかしないことよ。」

さうきつぱりと言ひながら、エルジイはヴァイオリンを箱に入れてルイに渡しました。ルイは嬉しさに幾度も「おじぎをしながら、

なヴァイオリンの真いてあるのを目を留めました。

「おや」と博士は驚いて言ひました。「あの子は

ヴァイオリンを忘れて行つたぞ！」

「いゝえ、さうぢやないの、」とエルジイはにっこりしながら、「わたしね、明日までわたしのを貸してやつたの。」

博士は喫驚して、俄にましめな顔になりました

「それは飛んだことをしたものだね。お前のヴァイオリンは、あれは大變にお金がかゝつてゐるのだよ。もしあの子が不正直だつたらどうします？」

「そんな、そんなことはありませぬわ、」とエル



「では明日屹度持つてまいります。」  
さう言つていそ／＼と歸つて行きました。

エルジイは窓のそばへ行つて、歸つて行くルイのうしろ姿を見送りながら、自分があの子を幸福にすることが出来たのを喜んで居りました。

間もなく博士が戻つて来ました。そして、エルジイが獨りてゐるのを見ると、

「ルイは何處へ行つた？」と訊きました。

エルジイは、叔父さんが待つてゐるからと言つてルイは歸つたと話しました。

「あれは中々利口な子だ。」と博士は言葉をつめて言ひました。「事情をよく調べた上で、もし相當なものであつたら、お前のいふ通りに稽古をさせてやりませうよ。」

「あゝ、あとうさん！」とエルジイは思はず感謝の叫びを擧げて、博士手のをぎゆつと握りました。所が其の時、博士はそばの椅子の上からくた

ジイはどきまぎして言ひました。「だつてあんなにいゝ顔をしてゐるのですもの。屹度持つて来ますわ。」

「でも、もし持つて来なかつたら？」  
博士が重ねてさういふと、エルジイは急に悲しくなつたやうに涙ぐみました。で、博士はそれきり何にも言ひませんでした。何といふ不幸でしたらう！

博士のいやな豫言は中つて、ルイは翌日来ませんでした。夕方になつて、博士はルイが住んでゐると言

つた所へ行つて見ました。ルイとルイの叔父さんが其處にゐたことは實際のたのでしたが、其の



朝急に立つたとかで、何處へ行つたのか誰も知りませんでした。

エルジイはこのしくじりを大變氣にしてゐました。で博士も長い間、その事は遠慮して口にも出しませんでしたが、でも、だんくんに氣にかけ方が薄くなつて、後にはあとうさんから人好しだとからかはれても情けないやうになりました。

それから五年経つたある日の事でした。エルジイは博士と一緒に或る音楽會へ行つて、一番前列に坐つて居りました。

『あら可笑しい。』とエルジイはプログラムを讀ながら、今度出るヴァイオリニストはルイ・ルブランといふ名だわ。あとうさん、あのルイでせうか？』  
『さうかも知れない。』と博士は苦々しげに言ひました。

丁度其の時其のヴァイオリニストが舞臺へ出て來ました。エルジイは思はず飛びあがりました。『そら、あのルイですわ。御覽なさいあとうさん。』

ルイは大喝采のうちに舞臺を去りました。と間もなく一人の男が二人のゐる所へやつて來ましてルイ・ルブランがま目に懸りたいといつてゐるから、恐れ入りますが樂屋までお出でを願ひたいと言ひました。

二人が行くと、ルイは聲をあげて喜びました。長い間博士とエルジイとに逢ひたいと思つてゐたのを、聽衆の中で偶然に見つけたのだと言つて非常に喜びました。ルイは殆ど涙を流さんばかりにしながら、エルジイのヴァイオリンを取つてしまはうなどは自分にも思はなかつたのだが、叔父が、ルイがいけないと言ひ張つたにも拘らず、直きにそれを賣つて、其の金で直ぐにリヴァアブルへ行つて、其處からアメリカ



前と住所とを忘れてしまつたので、自分の心にもない不正直を、長い間言ひ釋くことが出来なかつたとのことでした。  
次の日、ルイは美しヴァイオリンをエルジイに送りました。それが今ではエルジイの最も大事な持物の一つになつて居ります。(をはり)

ん。』とエルジイは嘖きました。

『なるほど、あの子によく似てゐる。』と博士は其の音楽家をむつと見てから言ひました。それはほつそりとした十六七の色の淺黒い少年でした。

もしそれがあのルイであつたならば、ルイは實に驚くべき演奏者になつたのでした。聽衆はみんな魔法にかけられたやうに耳を澄まして居りました。そして演奏が済んでしまふと、誰もかもみんな酔ひでもしたやうに席から立ちあがつて、もう一度演奏するやうにとたゞ叫ぶばかりでした。

エルジイとあとうさんとは勿論舞臺の直ぐ前に立つて居りました。ルイ・ルブランは舞臺に立つて、上品なおじぎをして居りましたが、と不意に、二人に氣がついて、明らかに跳びあがりました。ルイはやがて、嬉しうな顔をしながら『マールセイユ』を弾き出しました。

『わたし達を覚えてゐるわ。』とエルジイはびつくりして嘖きました。『わたし達に彈いてゐるのです。』

へ漕つたのだと五年前の事を詳しく話しました。そしてアメリカへ行つてからも、暫くの間はみじめな目にばかり遭つて居りましたが、ふとした事から、ある情深い人に救はれて、其の人の世話で立派な音楽上の教育を受けて今日のやうに成功したのですが不幸にも博士の名





黒い帆のお舟  
白い帆のお舟

お舟が来るよ  
お舟が来るよ

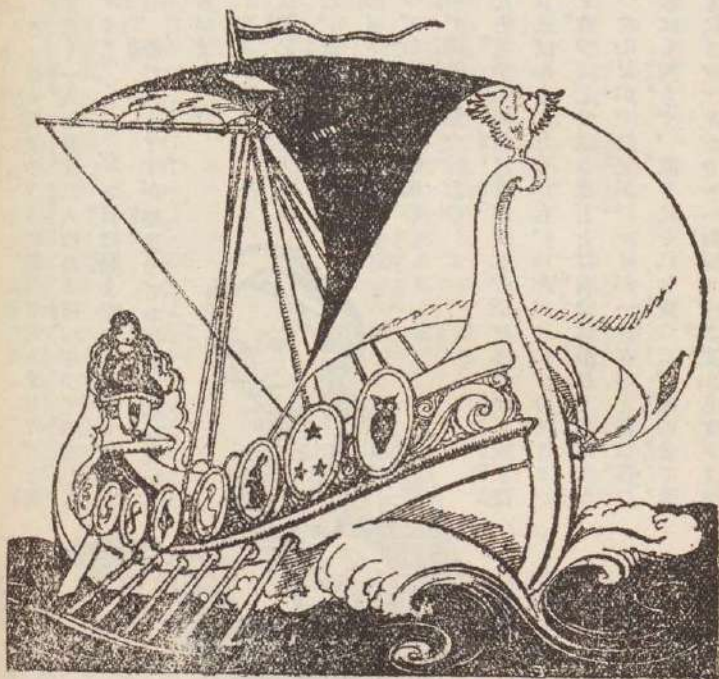
ギイッ  
ギイッ

(II)

黒い帆が通る  
白い帆が通る

女王様の舟は来るかしら  
(ゆふべ母さんが云つたよな)

青いお舟は来るかしら  
(ゆふべ母さんに聞いたよな)



黒いのは僕  
黒い帆のお舟  
白い帆のお舟  
白いのは君の

お舟が通る  
お舟が通る

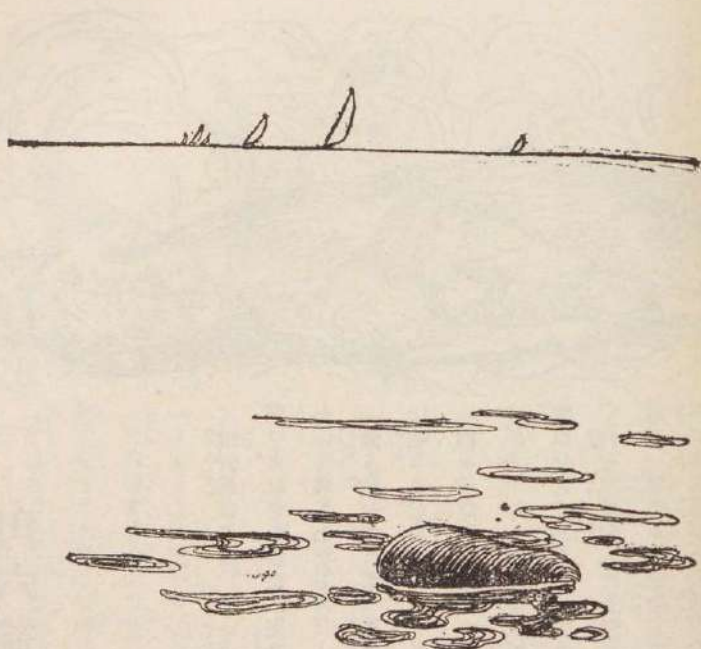
ギイッ  
ギイッ

(I)

瓜の舟

安藤華子





あらあら来たよ  
ほんとに来たわ

五〇

(花ちゃん見えた、僕のだよ、  
僕、まつさきにみつけたよ)

(兄さん嘘よ、あたしのよ、  
あたしが先に、みつけてよ)

青い帆が見えた！  
青い帆が見えた！

(III)

ギイツコ  
ギイツコ

お舟が来たよ  
お舟が来たよ

青い帆のお舟  
待ちに待ったお舟

だんだん近づいた  
たうとう来たわ！

(ゆふべ母さんに聞いたよな  
青いお舟はたうと来た)

(けれど女王はかげもなく  
青い大きな瓜ばかり)

甜瓜がふかり  
甜瓜がふかり

.....

五一





## 山六爺さん (長篇童話)

沖野岩三郎

五二

二

山六爺さんは、恐々小さい聲で、エヘン！と咳拂ひをしました。が、夫れでも狼は二疋共、能うく寝込んで、矢張りグウ〜と鼻をかいて寝ておました。

「餘り食べ過ぎて、睡込んでしまつたのだなア。」と爺さんは婆さんに囁きました。

「ねエ、鹿の一疋も一度に食べたもんだから……」と婆さんも囁きました。そして今度は婆さんが、エヘン！と大ぶんな聲で咳拂ひをしました。が、狼は矢張りグウ〜と寝ておました。

何を思ひ出したか爺さんは、急に忍びあして家の方へ走り出したので、婆さんも吃驚して「待つて下さい、待つて下さい」と小聲で叫び乍ら爺さんの後へついて走りました。

山六爺さんは家へ走つて行つて、毎日山へお狩りをされて持つて行く、鹿の革で拵へた小さい袋を二つと、そして長い細引一筋を持つて、又裏の山へ走つて行きました。

「もし〜爺さん、そんな物を持つて何うなさるの？」  
婆さんは心配らしく問ひました。

「見て居ろよ、面白い事をするんだから。」

「面白い事？ どんな事を？」

「何でも宜い、一緒に来て御らん。」

山六爺さんは腰にさして居た鎌で、袋の底の所へ、小さい穴をあけながら、またエヘン！と咳拂ひをしたが、狼は矢張りグウ〜と言つて眠つてゐます。

「よし〜大丈夫だ。」と山六爺さんは獨りごとを言ひ乍ら、荷と狼の傍まで歩いて行きました。そして一疋の狼の頭へ其の革の袋を、そらつと被せて耳の所で其の紐を堅く結びました。けれども狼はぐう〜云つて、ちつとも眼を覺しませんでした。

爺さんは「面白い〜」と心で點頭しながら、他の一疋にも革の



五三





袋を、すっぱりと被せて夫れを耳の所で堅く結びました。夫れから爺さんは、細引を取出して、一疋の狼の右の前足と後足と、他の狼の左の前足と後足とを、しっかり一緒に縛つて、其の端を樫の木の幹に縛りつけて置きました。

爺さんは、さも面白さうに、ニコニコ笑ひながら、婆さんの所へ戻つて來ました。そして腰の煙草容を外して、煙管筒から眞鍮の煙管を出して、夫れを木の葉でコシコシと磨き初めました。

爺さんが煙管を磨いて、夫れから其の中の脂を除つて、スバ／＼と煙草を一服吸つた時、一疋の狼はムクリと起上りました。しかし右の足がお隣りの狼の左の足と一緒に縛れてゐるので、ウーウ…と變な唸り聲を立て、ぐしやりと前の方へノメつたのです。すると片一方の狼も吃驚して眼を覺したが、矢張り足を縛られてゐるので、ウーウ…と變な聲で唸りました。夫れが二疋共スツポリと革の袋を頭へ被せられてゐるので、其の恰好の可笑しさつたらない、何とも言へない滑稽な狼が出來上つたので、婆さんは思はず、ハハ、と笑ひ出しました。爺さんも手を拍つてハッハッとして笑ひました。

爺さんと婆さんに笑はれた狼は、餘程腹が立つたと思え、いきなり二疋共、人間の聲のした方へ駆け出さうとしましたが、何を云ふにも頭には袋が被せられて眼が見えず、足が縛られて居るし、あまけに其の繩の端が樫の樹へしっかり縛られて居るので、二疋の狼はウーン、ウーウ…と唸りながら、ばた／＼と狂つてゐました。

「よし、あゝして明日の朝まで放つて置け。」

山六爺さんは斯う言つて、煙草容を腰にさして、ひよこ／＼と家へ歸りました。婆さんもクツ／＼笑ひ乍ら狼を見返り／＼家に歸りました。

狼は其日一日と其晩一晚と、ウーウと唸り通しに唸つてゐましたが、翌る朝爺さんと婆さんが裏の山へ行つて見た時は、最う疲れ切つてへト／＼になつて臥つて居ました。

「あい／＼狼さん、辨當袋を被た狼さん、お腹が空いたらうネ。可愛相に……」

爺さんは繩の端を樫の樹から解いて、夫れを引張りました。狼は二人三脚では無くて、二疋六脚で、バタバタし乍ら、爺さんに引か







れて、とう／＼爺さんの家まで引張つて来られました。

内庭に立込められて居た「黒」は爺さんと婆さんとが戻つて来たので、クンクンと鼻を鳴らし乍ら障子の際まで走つて来たが、がらりと爺さんが戸を開けると、さア大變です。二疋の狼が、ウーウ、ウーウと唸りながら家の中へ轉がるやうに飛込んで来たのです。

「黒」は恐ろしくて堪らないから、耳を垂れて尻尾を兩足の間に引込んで、床下へ逃げ込んで了ひました。

「黒」 恐ろしい事はない、眼の見えない、口の開かない、足を二本と隣りへ預けた狼だよ、出て来い、出て来い、大丈夫だよ。」

山六爺さんはかう言ひ乍ら入口の柱へ、其の狼を縛つた繩を結びつけて置いて、

「婆さん、俺はこれから、裏の山へ薪を研りに行つて来るから、「黒」と狼を頼むよ。」と言つて、斧を肩掛けて裏の山へ登つて行きました。

俗、不思議な事もあるもので、爺さんが裏の山を一町ばかり上の方へ行つた時、不圖向ふの藪の中を見ますと、大きな大きな鹿が、首を伸して立つてゐるのです。爺さんは吃驚して、

「わあッ！と叫びました。鹿は矢張りジツとして立つてゐます。

「どうしたんだらう？」

山六爺さんは吹きながら近寄つて見ますと、鹿がジツとして首を伸して居るのも道理です。大きな三ツの枝になつた二本の角には、「猿捕莉」といふ刺のある藪が、ぐる／＼に捲付いて、前にも進めず、後にも戻れず、仕方なしに立往生をして居るのでした。

これを見た爺さんは、其儘家へ飛んで歸つて、婆さんと二人で、細引を二筋持つて山へ上つて行つて、其の鹿の前足と後足を、しっかりと縛つて置いて、夫れから其の猿捕莉を鋏で切取つてやると、鹿は一生懸命に前の方へ駆け出さうとしたが、足を二本づゝ縛られてゐるので、駆け出す事が出来なくて、山を下の方へ下の方へと、ころ／＼轉がつて行くのでした。

さうして、とう／＼家の後まで鹿が轉がつて来た時、爺さんと婆さんとは、よいしよ、／＼と其の鹿を家の中へ擔ぎ込みました。すると「黒」は、いきなり、ウーウと唸つて鹿に飛びかゝらうとしたが、爺さんは黒を叱り付けて鹿の傍に近寄らないやうにしました。







さア、さうすると狼は鹿を見ては、ウーウと唸る、犬を見ては、ウーウと唸る、爺さん婆さんを見てはウーウと唸る。「黒」は鹿を見てウーウと唸り、狼を見ては恐ろしさうに尻尾を垂れて床下へ逃げ込もうとします。鹿は狼を見ても爺さんを見ても恐ろしくて堪らなから、外へ駆け出さうとします。けれども爺さんは四足を出來るだけ一つ所に近寄せて繋いで置きました。

かうして、又三月ばかり一緒に養つてゐましたが、其年の暮に、爺さんは鹿の顔の革袋を取り除いて、夫れから「黒」の革袋も除つたが、黒はもう鹿に咬付くやうな心はありませんでした。

狼は夫れからまだ半年ばかり革袋を被せられてゐましたが、とうとうお終には温順しくなつて、袋を除つて貰つたが、最う爺さんにも、鹿にも婆さんにも犬にも咬みつかなくなつてゐたので、爺さんの家は狼が二疋と、犬が一疋、鹿が一疋、夫れに爺さんと婆さんと六人で仲よく暮す事になりました。爺さんの本當の名前は彌六といふのでしたが、山の中の一軒屋で獸と六人暮しだといふので、誰言ふとなく、山六爺さんと呼ぶやうになりました。(ついで)



【「山六爺さん、お辨當容の革袋が、もう二つあるだらう？ 早く夫れをもつて来なすよ。」】

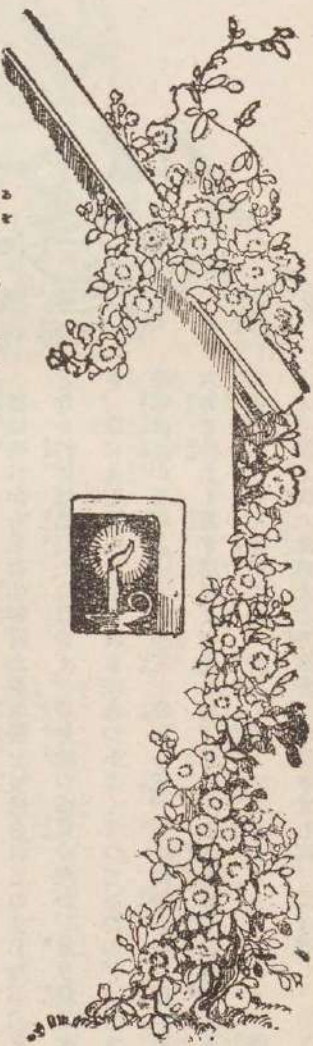
爺さんは、さう言ひ乍ら黒の首筋を捕へて、婆さんの持つて來た革の袋を「黒」と鹿との頭へすつぽり被せました。そして其の端の方に小さい穴が明いてゐるのでした。

さア、其晩は山六爺さんの所は大變な騒ぎでした。「黒」は眼が見えないので、ギャンギャンと鳴立てる。狼はウーウ、ウーウと唸る。鹿は兩足を縛られたまゝ跳ね廻る、夫れは夫れは何とも言へない大騒ぎでした。

けれども爺さんは狼と犬と鹿とを、一つ所に繋いで置いて、毎日毎日程んなものを少しづつ食べさせてやりました。犬も狼も鹿も皆な、革袋の尖の所の小さい穴から少しづつ物を食べさせて貰ふので随分お腹が空きました。

かうして爺さんは狼と犬と鹿とを三月ばかり養つてゐましたが、或日の暮、婆さんと相談して、狼と犬との顔に被せてある革袋に一つの窟穴を明けて、片一方の目だけ見えるやうにしました。





# 青いボート

徳永壽美子

高く低くかさなり合つた山々にとりかこまれて、廣い湖がありました。春もまだ浅い三月の初めのある夕ぐれです。湖はまるで油をとかしたやうに滑かに風いで、小さな波のひとゆらぎさへしませんでした。

日は次第に暮れて、水の表も次第に薄暗くなつて來ました。南の方の山の上に、しらじらと浮んでるた満月近い月は、だん／＼と明るく、しかしおほろに霞みながら、光り初めました。隣んでゐるのは月ばかりではあり

く坐つたが湖のボートで、中には二人の子供がのつて居ました。オールを執つてゐるのは、十二三になる男の子でした。

「あゝ、兄さん。お月様が」と、十ばかりになる妹は、ふと空を見上げると大きな聲で云ひました。

「うん、少し遅くなり過ぎたねえ、お母様がお待ちかねだらう。」

かう云つて男の子は、オール持つ手に更に力を籠めました。

この二人の兄弟、政彌とすみ子のお家は、湖のすぐ岸にありました。屋根の尖つた、えび茶色に塗つた小じんまりとした西洋館で、垣根にはすつかり薔薇がからまつてゐて、春になると眞白な花が好い匂ひに咲きこほれました。そこは至つて淋しい處で、物を賣るやうな賑やかな町は、湖の向側でしたから、歩いてお使ひに行くには湖をぐるりと一廻りしなければなりません。さうすると一里近くもあるので、政彌はいつも漕ぎ馴れた自分の小さなボートにのつては、湖の上を一直線に町まで行つ

ません。重なり合つてゐるあたりの山々も、薄暗くなつた廣い湖の表も、一樣にほんやりとして、まるで靜かな眠りに落ちかゝつてゐるやうに見えました。只時々、何とも知れない水鳥が、かすかな聲を立てながら、水の上に翼を打つて、すうつと飛び去るのが、目が覺めてゐるたゞ一つのものでした。

暫くすると、ふと何處からともなく、さあつ、さあつと水を切るオールの音がして來ました。見ると、それは青

たり來たりしてゐました。

この子供達のお父様は、ある兩船の船長でした。長い間ヨウロッパの方へ行つてゐてお留守でしたが、今日の晝過ぎにそのお父様から電報で、今夜遅く歸るといふお知らせがありました。二人の子供とお母様とは、どんなにか喜んだでせう。

「では政ちゃん、御苦労だけれど町まで行つて、お父様のお好きなものを色々買つて來て下さい。」と、お母様は忙しさに云ひました。

「ええ、ええお母様、直ぐと行つて來ます。すみちゃんも連れてつていゝでせう。」

「いゝとも、いゝとも。二人でよく氣を付けて行つてお出で。」

かうして二人は出かけたのでした。そして出來るだけ急いで買物をしましたが、なにしろ出かけるのが遅かつたものですから、それでこんなに暗くなつて了つたのでした。

政彌は可なり疲れたので、漕ぐ手を少しやすませまし



た。しかしボートはなほもゆるい速力ですべつて行き  
ました。暫くするとすみ子は、そばに置いてある、籠  
にもられた真赤なりんごに眼をやりながら、にこ／＼  
して云ひました。

「ねえお兄様、お父様は随分久しぶりね。もう半年以  
上もお逢ひしなかつたのよ。」

「さうだね、どんなにおなりになつたらう。變つたか  
しら。」

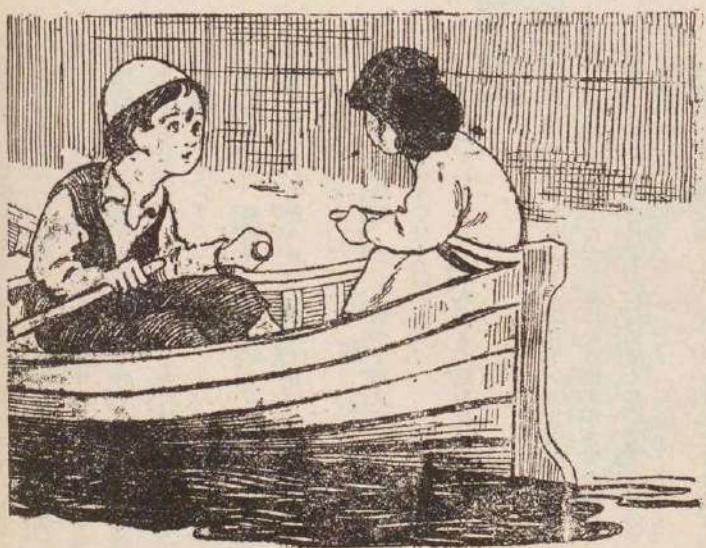
「屹度また、まつくろくろになつていらつしやるわ。  
そして私達を抱き上げて「ヤ、大きくなつたな。何處  
の子かと思つた。」なんて……」

「アハ、……。」「と、二人は嬉しさに笑ひました。  
その笑聲は廣々とした水の上を、遠くまですう／＼と擴が  
つて行きました。

「だけど、」と、政彌はまたオールをとり上げて靜かに  
漕ぎ初めながら、そして考へ込んだやうな顔をして云  
ひました。「お父さんはじうお留守で、ほんとに淋し  
くつてつまらないねえ。だから僕は大きくなつたら、  
いつでもお父様やお母様のそばに居て、そして世の中  
の爲めになるやうな事をする人にならつともりさ。」

「そりやあ一等いゝ事だわ。そして何をやるつもり？」

「僕かい」と、政彌はにこ／＼して「僕はね、詩を作  
る事が大好きだから、立派な詩を作る人になるんだ。  
僕の作つた詩を読む人はね、どんなに悲しくつて泣い  
てる時でも、すぐに心がせい／＼して、好い氣持に  
なるんだ。それから、何か苦しい事があつて、ひと思  
ひに死んで了はうなんて思つた人が、今死なうとして  
ゐる時でも、僕の詩を読んで見ると、段々心が落付い  
て、楽しくなつて、死ぬのはよしてしまふのさ。それ  
からまた、戦争をしてゐる人達の處へ行つて読んで聞  
かせると、その人達は、戦争なんぞしてお互に人を切  
つたり切られたり、國を取つたり取られたりする事が、  
どんなに悪い事で、どんなにみつともない事かといふ事  
がよく分つて来て戦ふ事をやめてしまふんだ。ねえすみ  
ちゃん。僕は自分の心は勿論、あるつたけの人の心をみ  
んな正しく、美しくする事が出来るやうな詩を作らうと



思つてるんだよ。」

「まあ、なんて立派な事でせう。」

さつきからばつちりした眼を輝かせながら、一心に聞  
き入つてゐたすみ子は、こみ上げて来るやうな聲でいひ  
ました。そして「私ね、お兄様、お兄様にまけないや  
うな仕事をするわ。」

「すみちゃんなあに。あ、僕知つてるよ。」

政彌は、汗ばんだ丸い頬をにこ／＼させ乍ら云ひま  
した。

「知つてゝ？ちやあ當てゝ御覽なさい。」



「歌だらう。すみちやんは本當に好い聲だし、歌を歌ふ事が好きだものね。」

「當つた。」と、すみ子もにこ／＼しました。

「私は歌を歌ふ人になるのよ。私があるつたけの心を籠めて歌を歌ふと、聞いて居る人は、みんなそれは／＼きれいな善い心になるのよ。子供達はお父様やお母様が懐しくなつて、思はず顔に飛び付きたくなるし、それから、御病氣で死にさうになつて苦しがつてゐる人は、氣がすうつとして樂になつてしまふの。それから弱蟲の子は勇氣が出て来るし、懶けものはせい出して働き出すのよ。悪い人は悪かつた事がよく分つて、思はず神様にお詫びをしたくなるし、善い人はなほ／＼善い事をしないではゐられなくなる程心が樂くなるの。」

「それも立派な事だ。」と、政彌も強い聲で云ひました。

そしてオールを置いた手ですみ子の手をとると、固く握りしめて、「すみちやんのやうな、きれいな心を持つてゐる人なら、蛇度それが出来ると思ふよ。だからお互にいつまでもこの心を忘れずに、何でもいゝから自分自分

すみ子はかう云つて湖が遠くに見える山の麓が、ちつとすかさやうにして眺めました。そのはる／＼と霞んだ湖の表には、時々影のやうに小さな舟が行つたり來たりしてゐました。

「すみちやん、僕は何だか歌を歌ひたくなつて來た。オールに合せて歌ふから聞いてお出で。そして僕がすんだら、すみちやんが歌ふんだよ。いゝかい。」

かう云つたかと思ふと、政彌は大きな、澄んだ聲で歌ひ初めました。

春の晩、眠つたやうな湖に、

しづかな夢と浮び出た、

青色ぬりの小さなボート。

中のお客はたれかと思へば、

可愛い子供がたゞふたり、

ギツコン、ギツコン、ギツコン

すみ子の細い聲が、すぐに續きました。  
月が出た、月が出た、  
水の中にも月が出た。

六四  
のお得意のものを、一生懸命せい出して磨かうちやあな  
いか。そして、一生かゝつてもいゝから、立派な仕事を  
仕上げやうね。」

「えええお見様。」と、すみ子も力を籠めた調子で云ひ  
ました。

二人は暫く手を取り合つたまゝ、じいつとしてゐまし  
た。舟はひとりでに靜かにたゞまつて行きました。

いつの間にか山はすつかり暮れて、黒々と沈んでしま  
ひ、星はだん／＼数が殖えて、あつちの方でもびかり、  
こつちの方でもびかりと輝き初めました。まだ遠くつて  
も、さすがに春の夜だけあつて、何となくほつかりと暖  
かで、そして何だか半分夢の中にもゐるやうな氣がさ  
れました。二人の子供は、暫くうつとりしてゐました  
が、政彌はふと我に返ると、

「あ、遅くなつた。さあ、急がうよ。」

と、あわてゝオールを取り上げました。

「お母様がさぞ淋しがつていらつしやるでせうね、あ  
あ、もうそろ／＼お家が見え初めたわ。」

あらあらせうせうさん、  
靜かに漕いで下さいな。

月が碎けて散ります、

金の小人がをどります。

ちらちらとをどります。

ギツコン、ギツコン、ギツコン

政彌がまた歌ひました。

二人の歸りがおそいとて

窓の戸あけて母様は、

ろうそくに火をとますだろ。

暗い湖水を眺めては、

オールの音が響くかと、

耳をすませてお出でだろ。

漕げや漕げ漕げ、方のかき

母様只今かへります。

ギツコン、ギツコン、ギツコン  
小さなボートは二人の子供をのせて、だんだんお家の方  
へ近づいて行きました。(をばり)





## 瘦牛

青木 茂

六六

ある田舎に豪農がありました。牛が四五頭、馬

が二匹、それに鶏、あひる、蜜蜂といふやうな澤山の家畜を持つて居りました。水田、畑、山林、何一として不足な物はありません。この主人は大相勸勉な人でした。しかし、少し不正直で、ずるい男でした。だから作男も、蔭では餘りよく申して居りません。

この主人は多くの貸家を持つて居りました。そ

が、あの小屋を貸してやつて、一ヶ月一圓五十銀の家賃を入れてくれれば、何よりだ。」と考へました。

『あゝ貸してもいいが、一ヶ月一圓五十銀の家賃だぞ、それでもいいか。』と申しました。夫婦者は承知致しまして、すぐ其の家に住みました。

それから暫く日が過ちました。不思議な事には、此の人達は一日何も仕事をしず、ごろ／＼寝て暮して居ります。それでゐて、はじめ引越して来た時よりずっと工面がよくなつたと見えて、少しは奇麗な着物を着、又御飯などは近頃大分御馳走があるやうです。豪農は、變だと思つて居りました。

金持の主人といふ者は、仲々よく氣の付くもので、この主人は、真夜中、小作人などが寢靜まつてから、そつと屋敷を見廻るのが常でありまし

の中で、一番汚い、ほとんど豚小屋のやうな百姓小屋と、半分倒れかゝつた牛小屋が誰も借手が無くつて、ながい間空いて居りました。

ところが、ある日の事、夫婦の大變に貧乏らしい百姓が、この豪農の處へ参りまして、貸屋と自分の連れて来た牛を入れるために牛小屋を貸して戴きたいと申しました。主人は一目見て、

『おやあや、えらい貧乏くさい奴だな。またこの牛はなんだ、まるで狼より齧てゐるじやないか。俺は生れて始めて、こんな瘠せた牛を見た。だ

た。齧れても忍んでゐないか、屋敷内のどこかの小屋で、小作人が酒を呑んだり博奕でもしはしないか。』と心配しながら。

或夜、そろそろ庭を見廻つてゐた時、例の小作人に貸した牛小屋から、薄い光が洩れるのが見えます。

『はてな今頃あの牛小屋の明りは何事だらう。時々小作人が博奕をするので困つた事だ。』と思ひながら、そつと牛小屋に近づいて、中を覗いて見ました。

中には、瘠牛と、牛の持主の男だけでした。男は片手に蠟燭を持ち、片手に木の枝のトンがつたのを持つて、

『牛よ、牛よ、金貨の糞したかね。』と云ひながら、牛の糞を木の枝でかき廻して居ります。すると美しい、小さいな金貨が一つ、牛の糞の中か



ら、ぴかりと光つて出て参りました。

「ちや、ちや、ちや……これは大體不思議な事だ。」と豪農は考へて居りましたが、男は、ぶつと蠟燭を吹き消して出て行つて仕舞ひました。

翌日は一日、朝から夜まで、豪農はこの事が忘れられませんでした。そして、今晚も、もう一度確めてやらうと決心しました。

夜になりました。そつと豪農は忍んで、牛小屋の脇に隠れてをりました。すると、やはり真夜中頃、男が出て参りまして、

「牛牛、牛よ金貨の糞したか。」といつて、また捜しました。すると一個の少いさな金貨が出て参りました。男はそれを持つて出て行つて、仕舞ひました。

豪農は、何とかしてこの金貨の牛を手に入れたものだと思へました。だが、誰でもそんな大切

を思ひ、

「どうだね、あんな猪牛は死なないのが不思議な位だ。早く人にもくれた方が食物徳さ。だが俺

は、少しあの牛の瘠せつ振りに氣に入つた處があるから、家の一番肥えた、乳のよく出る牛と取り代つことをしないかね。こんなうまい話はないよ。乳のよく出る牛はいくら安くつても四百圓はするがあの牛では五圓付けても貰ひ手は無位だからね。」

といふ、工合に持ちかけました。妻君は大喜びで、「でもち氣の毒様ですわ。もしそうして下さるな



六八  
な牛をおいそらと人に賣る譯はありません。いろいと毎日頭を悩ましてをりました。

或日の朝、男が町へ買ひ物に行くとして留守に致しました。その間に豪農は、男の妻君を、お茶を入れたからと云つて呼びました。妻君はお茶を呑みながら色々な世間話をした後で、

「家の亭主ほど物好きな人間はありません。全く、あの猪牛を生れてから五年にもなりません。自分の眼の玉の様に可愛がつてゐます。五年間も毎日旨い物ばかり食はしてゐるのに、乳一なれ出た事もない、やくざ牛を可愛がつてゐるのです。そして少しでもわたくしが手荒く牛を取扱ふと、それは腹を立て、打つのです。早くあんな牛は死んで仕舞へばいいのに。」と申しました。

豪農の主人は、あの夜中の金貨の秘密は自分の外、男の妻君も知らない事を知つて、少し悪い態

らば明日から旨しい乳も呑めます。では是非お願い申します。」と承知しました。すると主人は、

「だが一度取り代へたら、どんな事があつても、約束を破る事は出来ないよ。」と念を入れて、自分のいふ牛と猪牛を取り代へました。そして、今晚から金貨一枚づつだと一人で喜びました。

間もなく男が歸つて来て、妻君とひどく喧嘩をして居りましたが、しほしほとして豪農の處へきて、

「私の留守中に牛を取り代へましたそうで、私は、もうこゝにゐる事が出来なくなりました。長い間家を貸して戴いて有難うございましたが、又今日



から旗に出ます。これで失禮申します。でも、餘りこれから懇張らない方が爲だと思ひます。さうなら。」といつて、道具を集めて、それを肥つた牛の背中に乗せ、こゝを出發致しました。

しかし、豪農はにや／＼笑つて居りました。

男は何里も行つてから、又素敵に瘠せた牛を見つけた。そして夫婦が何か相談して其牛を安く買ひ、肥えた牛を高く賣つて仕舞ひました。

數年後、豪農は都へ用があつて出て参りました。その時不思議な噂を聞きました。

何でも王様に訴へ出た方は相手を牛詐欺だといひ、訴へられた方は、相手をまた牛泥棒だといひ張つて中々面白いお裁だといふ事でありました。豪農も何か思ひ當る事があると見え、その日一日の滞在をのばして、裁判を見て行く事にしました。

と考へになりました。今度は訴へられた男が、『王様、私は決して、この男を偽つた事はありません。此の男は勝手に私の瘠牛を引き出して、自分の肥えた牛を私の牛小屋の中に入れて置いたのです。自分勝手に都合のいい時取り代へた牛を、また今度都合が悪くなつたから元通りにしてくれ、などといふのは、どろぼうより太い云ひ分です。それから金貨の事で、王様は、不思議に思はれませうが、あの日丁度晝間金貨を一枚牛小屋で落しました。それを夜中に氣がついて捜してゐたのを、きつこの男が覗き見して、牛が金貨の囊をすろと思つたんでありませう。牛を勝手に盗み出して自分の牛と取り代へて、後で詐欺だなどとこの男が申しますのです。どうか公平なお裁をお願い申し上げます。』

王様は、『二人とも、そのいひ分に間違ひは無い

た。裁判所はもう人が一つはい詰つてをりました。やがて、この争つてゐる二人が出て参りますと、王様は御着席になられました。王様は二人に、『前達は、何事も正直にいはなければいけない。不正直に申立する時は、國の法として一番重い罰を負ふ事を懲えて置けよ。まづ訴へ出た者のいひ分を聞かう。』と申されました。訴へ出た男は、あど／＼と申し始めました。

『私はある日の事、此男の牛が、金貨の囊をする處を見ました。それで、此男の瘠牛と私の牛を取り代へました。すると、それつさり瘠牛は、銅貨の囊もしなくなりました。それで今度元通りに返してくれと申しても、此太い男は中々承知致しません。で、あまり腹が立ちますので、お訴へ申し上りました。よろしくお裁の程を願申します。』

王様はお聞になつて、『何と云ふ愚な男だらう。』か。』と申されますと、二人とも頭を下げました。そして、少しも間違が無い由を申し上げました。『訴へ出た方の男。お前は自分の愚を悔いるがいい。それで二度とこの愚をくり返すな。牛はお前の損じや。』と申され、又訴へられた男には、『お前は悪い智者ぢや。此度の事は許してやるが、一時も早くこの國から立ち退くがいい、ぐずぐずしてゐると牢屋にぶち込むぞ。お前の悪智恵ならば、ソロモンも欺く事が出来るだらう。』と申されました。

これを聞いてゐた豪農は、幾年か前に自分を夫婦でだましたのも此の男である事を知つて、男の悪智恵に怖れ入りました。笑つてはいけません。これは昔の話ですが、今の世には、もつと大じかけな、もつと上手なこんな事が、毎日悪者達に依つて謀られてゐます。(をはり)





狼と狐

ある高い山の麓に、小さな村がありました。村の人たちは、朝早くから野に出て、日が暮れるまでよく働きました。日が暮れて、お寺の鐘が鳴ると、めい／＼鎌をかたけて家へ歸るのでした。村の人たちは、まったく幸福で愉快に暮してゐました。

村のまん中に一つの路があつて、それが村はづれから二つに分れてゐました。一つは右へ、一つは左へ――

狼がこんなことを思ひながら、歩いてゐると、ちやうど、左手の路から、一匹の狐がやつて來ました。「今日はまあ何ちう日だらう。一日中牝鶏の鳴き聲を聞いた、ほんとうに飽き／＼するほど聞いた。だけど、わたしたちのやうに鶏のすきな者には、牝鶏の鳴き聲は、どんな音楽にも優れて快ものだ。わしは今晩きつと二三羽の鶏を手に入れて見る。わしは近頃めつきり瘦せた。骨がこんなにゴツ／＼する程出て來た。それに赤ん坊たちがひい／＼言つて喰物をせがむし、今晩はどうしても捕らなくつちやならない。」



橘逸雄

ある晩、お月様の光で山も、村も、野も、路も、銀色に輝いてゐました。と、一匹の狼が右手の路からやつて來ました。

「あゝ腹が空つた。この一週間ちうものは、まるで何にも喰べないんだもの。あの山へ行けば、むろん何でも喰べる獸はゐるが、あ奴らを捕つて喰ふには、俺はあんまり年をとりすぎた。といつたところで、じつとしてゐる

だ」と思ひながら、大きな口を開けて、そつと飛び足で近寄つて來ました。しかし、狐はすぐとそれを知つて、ふりかへつて丁寧言葉をかけました。

「おや、狼さんでしたか。お珍らしいございます。別に

お變りはありませんか。」  
「ありがたう。お蔭様で達者でございます。誰でもお腹の空いた時はさうですが、それはそうと、狐さんあなたはどうしたんですか。二週間前にお見かけした時は、随分肥つてゐらつしやつたが、どうかなすつたのですか。」

と、狼もやさしく言ひました。しかしその眼は意地悪さうに光つてゐました。

「えゝ、私は病氣なのです。ひどい病氣なので、まったくあなたの仰るとほり、私は虫けらよりも瘦せてゐますよ。」

「でも、私にはそれでたくさんです。餓い時には、どんな物だつて甘いのですから。」  
「何を仰るのです。あなたはいつても冗談ばかり仰つて、餓じいのは私です。私の餓じさに比べたら、あなたの餓





七四

じさは私の半分位です。」「  
「どちらがよい戦いかわかることだ。」「

と言つて、狼は大きい口を開けて、今にも跳びかゝらうとしました。

「な何をなさるんです。」「

狐はびつくりして、ちよつと後へさがりました。

「何をすんだつて、雄鶏が時をつくらぬうちに、お前をかたづけるのだ。」「

「御冗談でせう。」「

「俺は冗談なんか言つてやしない。」「

「でも、あなたのやうなお賢い方が、何も私を喰べなかつても、他にいくらかも喰物

のあることぐらゐはご承知でせうか。」「

「とに角、一番賢いものは一番飢えてゐるのだ。」「

「じもつともです、こもつともです。ですけれど……。」「

「ですけれどなんちう面倒なことは止してくれ。一口に言へば、俺はお前が喰ひたいのだ。それだけだ。」「

「私には、これでも子供があるのです。ちつとは憐憫といふことを考へてください。」「

狐は尻尾を眼のふちにあて、泣き聲で言ひました。

「何を言つてるんだ。俺は暇じくつて死にさうなのだ。」「

「慈善は近きより施せ」ちふことを知らぬか。」「

と、狼は齒をむき出して言ひました。

「どうしてもお聞きいれくださいならなければ、いたし方がありません。私はあなたの犠牲になりませう。しかし、私をお喰べになる前に、たつた一つのお願がございますから、聞いてくださいませんか。」「

「願とは何だ。俺はちつとも待てないのだ。早く々々。」「

「あなたもご存じでせうが、この村には、大變な大金持があるのです。その主人は、一年間に喰べるだけの油揚

をこしらへて、それを古井戸の中に蓄へてゐるのです。

私はするぶんその井戸へ行つて、油揚をとつて來ました。

そして、子供たちに喰べさせました。で、私のお願といひますのは、あなたにその井戸まで來ていたよといひ、私の死ぬ前に、油揚の御馳走をさし上げたのでございませう。」「

「油揚が井戸に？だが、もう皆なくなつてゐるだらう。」「

「どういたしましたで、あのたくさんの油揚が……」

「よし、ちや行かう、案内しろ、だが途中で逃けたり、囁したりしたら、ほんとに承知しないぞ。」「

籠の村はしんとして眠つてゐました。

狐と狼はしづかに忍んで行きました。と、どこからか、何だか甘しさうな匂がして來ましたので、二人は急に立ちどまつて顔を見合せました。同時に犬の近よつてくるけあひがしたと思ふと、急に犬が吠え出しました。

「おい大丈夫かね。」「

と狼は小さい聲で狐に尋ねました。狐はだまつてうなづ

七五



きました。しかし犬が吠えると、誰かがやつて来るかも知れないといふので、自分の後で小さくなつてゐるやうにと、狐は狼に合圖しました。

そのうちに、犬の吠えるのも止んで、匂もしなくなりました。二人の盗賊は、身をかためてあたりを見廻しながら、足音をたてないやうにして忍んで行きました。

やがて、井戸へ着くと、狐は首を伸して井戸の底を見ました。底には水が少しあつて、それにお見様の光が映つて黄く見えました。

「まあたくさん油揚ーこんな甘さうな油揚をごろんになつたことがありますか。」と、狐がさうやきました。

「いや見たことがない。」

狼はお月様の光が映つてゐることは知らないで、もう貪慾さうな目付をして答へました。

「では、降りてお腹が一ぱいになるまでお上りなさい。」

「しかし、まあお前から先に降りるのだ。お前が先へ降りるのが厭だと言へば、早速喰つてしまふぞ。」

「え、私は喜んで降ります。ではお先へご免なさい。」

「まあ、あなたにも賢あはない。も一つの釣瓶にお乗りになれば、ひとりでに降りられるぢやありませんか。」

狼は首を上げて、釣瓶を見つめました。そして、

もぐ／＼しながらやつとそれに乗りました。

狼は狐の四倍も重さがあるので、

狼の乗つた釣瓶はする／＼

と勢よく井戸の底へ降りまし

た。すると、狐の乗つてゐた

釣瓶はすうと上へ上つて來まし

た。

狼はそこで、はじめて狐に

瞞されたのぢやないかと思ひま

したが、しかし、まだ油揚が少

し位残つてやしないかと思つて

探して見ましたが、油揚の匂も

しないので、

「おーい、油揚はどこにあるんだ。」

と、どなりつけるやうに言つて狐を見上げました。



と言つて狐が降りかけやうとすると、狼は、

「そして、皆喰べるんぢやないぞ。喰べたらお前のためにならないから。いゝかい。」

「御安心なさいよ、するぶん疑り深い人。」

と言つて、狐は井戸の上に懸つてゐる釣瓶にとびついてする／＼と降りました。

井戸の水は浅くて、狐の膝迄もとどきませんでした。

「まあ何んてたくさんなことせう。思つたよりかすつと多ございませう。」

狐は井戸によりかゝつてゐる狼を見上げてかう言ひました。

「ちや早くそれを持つて上れ。」

と、狼はいひつけるやうに言ひました。

「どうしてこんなたくさん油揚がとつて上れますか。」

「ちや、半分づゝ持つて來い。」

「だつてお皿がないんですもの。それよりかあなたも早く降りてゐらつしやい。そして、二人で運びませうよ。」

「うむ俺はどうして降りたらいいんだ。」

「油揚ですつて、私の子供はまだ油揚を喰ふほど大きくなつてゐませんよ。」

「畜生！瞞しやがつたな、ウ

ウ、、、」狼が齒を喰ひし

ばつて、井戸の底でぶん／＼

おこてる頃には、狐はそこ

いらに居ませんでした。

「あんまり巧くいきました。

でも、空がだん／＼曇つて來

た。この分ちや明日は大雨だ。

あの古井戸も水が一ぱいにな

つて奴さんひよつとすると浮

び上つて來るだらう。

さうだ／＼、そんなことに

構てゐられない。それよりか

こないだ見たあの肥つた鰻を捕りに行かう。」と、狐は

ひとり言を言ひ乍ら駆けつて行きました。(まはり)



菜種ななぶたの花は  
 パラリと咲いた  
 後あとから咲いた  
 豌豆えんどうの花も  
 パラリと咲いた  
 こをとろことろ  
 親父おやぢは留守だ  
 雲雀ひばりの子とろ



雲雀ひばりの子とろ  
(遊戯唄)

野口雨情

こをとろことろ  
 田甫たなぶの中の  
 雲雀ひばりの子とろ  
 一  
 二  
 三  
 四







童謡

野口雨情選

鬼ごっこ

埼玉縣北埼玉郡三田ヶ谷  
新井雨蛙

ちゃんけん

負けた

負けたら鬼だ

鬼さんこつち

長屋のうしろ

三べん逃けた

凧

福島縣田村郡三春町  
國分守時

凧水くみか

凧もないのに  
ふるえてゐる

ユダの木

罪のないエス様  
賣つた

ユダの木

悔にくびれた

ふるえてゐる

ユダの木

雪人形

雪人形

富山縣婦美郡杉原校  
中島映二郎

解つた解つた

困つたもんだ

雪のお人形さま

お日さま恐くて

泣いてゐるんだ

林檎と密柑

明日は  
風だぞ  
炭小屋で  
火にあたれ

星

臺灣臺北府前街一丁目二  
吉鹿鹿之助

森の上に光つてる

一目小僧のお星さま

お星さま高いな

一目小僧高いな

小父さん

宮城縣仙臺市北目町  
錫木碧

あしたもおいで

あさつてもおいで

次のあさつてもおいで

毎日おいで

私のすきな

お囃の上手な

ふとつちよの小父さん

東京小石川區大塚通町廿四  
鷹田守一

大騒ぎだ大騒ぎだ

林檎と密柑が喧嘩だ

林檎がのつそり追つかけた

密柑はさつさつと逃げ出した

真白な

西洋皿

蒼い線が二本

花まつり

群馬縣勢多郡粕川村  
青柳花明

四月八日は

花まつり

甘茶かけませう

お釋迦さま

甘茶かけても

だまつてた

うんとも言はない

十日戎

大阪市南堀相生町戎橋筋  
乾定二郎

竹の梯と藪口は

十日戎の寶物だ

ねぢれねぢれたねぢれ

丸い鈴からおたやんが

ほんと割つたら飛んで出た

雪と幼児

相洲鎌倉崎ヶ谷  
水澤英雄

森の奥に

静かに雪が積ります

母さんの膝にだかれて

美しい

いろんな夢を見る間にも

森の奥に

しんしん雪は積ります

ユダの木

北海道函館區曙町  
茂木幸子

お釋迦さま

自働車

京都市室町通二條下  
中井右一郎

ブーブーお化け

自働車のお化け

明い眼玉

真暗い街を

ブーブー

住つた

小猫

岩手縣盛岡市四ッ家町  
花井清

コロコロ毬がころけた

小猫の三毛猫

這つてつておさへた

こつちの目も

キヨロキヨロ

そつちの目も

キヨロキヨロ





幼年詩  
若山牧水選

かねの音(賞)

朝鮮京城日出小學校尋三  
佐藤義信

があん／＼  
かねの音  
毎夕ひびく  
かねの音  
ふらんす教會  
いのりのかね  
今も夕方  
なりました

評、其體の音に耳を傾けてゐるつゝ美しい心が此詩の中によく出てゐます(牧水)

森(賞)

大阪 室山禮二

静かな森の王様が  
かぶりをふると  
美しい着物をきた  
鳥が歌ひだす  
森の王様はだまつてきいてゐます  
谷川の水は靜かにすべつてゐます  
評、何といふ美しい想像でしやう(牧水)

猫の尾(賞)

鎌倉大町二九九  
佐藤かつ熊

小さい／＼三毛猫や  
隣の庭を一寸見てね  
尾をピンとはりました  
評、面白い寫生ですな(牧水)

捕虜

徳島縣勝浦郡千代  
岸本 爽

赤い顔 高い鼻  
捕虜の兵隊さん  
大入道の兵隊さん  
夕日の街を

綴方

ゆきうさぎ(賞)

岡山市山下小學校尋二  
日比野 澤

きのふ、ゆきがふりましたので、學校からかへつてゆきうさぎを大きいのと小さいのと二つこしらへましたら、上手に出来たとお母様や姉様にほめられました。それからそれをおほんにのせておきました。けさおきてみましたら目の豆がおちて穴があいて、なん天のはの耳がかた方とれてをかしうございしました。そのまま學校にいつてかへりましたら、とけてもつとくをかしいかつこうになつてゐました。そしておほんには水が一抔たまつてゐました

お化ごっこ(賞)

朝鮮大邱公立第一小學校尋五

「ひやーつ。」といつて、起きてどんとんにけ出した。やがて、「あーんあーん」といふ泣聲が聞えだした。それで元の正體を表して行つて見ると、妹はおんおん泣いてゐる。僕は側へよつて、「ごめんね、／＼。」といふと、妹は前に首を振つた。すると、誰か僕の頭をなぐる。ふり返つて見ると弟だ。

「こらつ。」といふと、「元ちやんをなかせたから。」といふ。

その内にお母さんが上つていらつしやつた。そして、「大へんさわがしかつたやうですね。」とおつしやつた。

まへのあちやん

山口縣柳井小學校尋三  
壺田 義一

まへのあちやんは四つです。「かか一錢でんで」とをばさんにせがんで一錢もらふと、となりの菓子やに行つて「をばあん、かしやんな」と言ひます。

行馬辰二

お母さんがお風呂へ入られた後で、妹と弟を呼んでお化ごっこをした。僕は屏風のわきにあつた、お母さんの羽織を頭からかぶり、赤い五寸ばかりのきれを、血の變りに口へくはへ、「うらめしやー。」といつて、戸柵の中から出て行つた。

妹と弟は「ひやーつ。」と炬燵にかけあつた毛布をとつて、バタバタとそれをかぶつた。見るとあまり急いだからか、かくした足が四本ともにゆつと出てゐる。「頭かくてしりかくさぬ」といふのは、これだと思ふとをかしくなつたが、じつとこらへながら又、「うらーめしやあ。」と、變な調子でいつてゐると、その四本の足はそろ／＼と、毛布の中へ引つこんで行く。

僕はそこへしやがんで、出てゐる足をスースーとさすつてゐると、今度は

菓子やのをばさんが「せにをかしめてみな」と言ひますと、あちやんは「こんだき」と言つてお金を出します。をばさんが「どのかしかええ」と言ひますと、「あぶかし」と言ひます。をばさんにあぶら菓子をもつらふと、かけつてかへつて「かかこれかつた」と言つて、ひとりでしたべます。

小さな先生

兵庫縣平田小學校尋五  
永尾こふじ

ある秋の太陽の赤い夕方、私はふと子供のうたふらしい軍歌の聲を聞ききました。私は障子をあけてそつと外の襖子をのぞいて見ますとそこには七八才位の子供が四五人よつて運動會あそびをしてゐました。みんな寒い風に吹かれて林檎のやうな赤い頬をしてゐました。その中で一番小さな鼻を垂らした男の兒が小さいながら先生となつて柏



笑つて通つた

評、これもよき寫生の詩です、眼に見耳に聞いて感じた事を其まゝに歌ふとほんといき／＼した詩が出来ます(牧水)

### 梅の木

徳島縣勝浦郡千代校五年

長田 重治

けんを立てたか梅の木

お日さんつくのか梅の木

お日さんついたなら

黄ろいお菓子がつてくる

評、面白い空想詩(牧水)

### クロネコ

東京市曙星小學校一年

寺崎 平

ウチニオヂサンルシテイタラ

クロネコニハトリトリタクテ

一ペンヤツタガマダトレヌ

二下ウヤツタラトレマシタ

オヂサン、ハダシデオホサハギ

評、平さんは八歳ださうですがいいかにもさ

### 時計

北海道有珠郡壯瞥小學校六

山口 輝千代

チンチンチンとチンチンと動く

いつもとまらずチンチンと

大きな針も

小さな針も

いつも動いて廻ります

### 雪が降る

神戸市兵庫西町(十六才)

治部 君子

大きな雪は

とんだり はねたり

狂ふたり

小さな雪は

くるりくるりと

廻つたり

どつちも 一しよになつて

面白さうに

ダンスをしてゐる

子をとつて歩いてゐます。

『今から皆で元氣に菊見の歌をうたふのだ。一二三ハイ』

子供等は聲を合せて

うれしや今日の菊日和。

菊見に來よ叔母君の……………

調子の高い聲をはりあけて夕空のもとで手をふりながら輪になつて歩きました。子供等の一人が私の顔をみつめて他の者にさゝやくと皆きまりわるけに顔を赤らめて歌をうたはなくなりました。小さな先生は皆がうたはなくなりましたのでぶりぶり怒つて腹をたてゝ歸りかけたので生徒たちは頭をかしけて口口に小さい先生をなぐさめてゐましたもうあたりはうすぐらく近所の家にはほつちり明りがつきはじめました。

### 柏屋の店

岡山縣二本松第一小學校尋四

宇多 孝子

いもやのかみさんは、いちばんはなの釜のふたとつた。ふーと白い煙がたつた。

皆まつてゐた小さなお客は急にがやがやとさはぎ初めた。僕にも一錢、私には一錢、僕にも二錢といふて、ふろしきだの、まいかけだのにくるんで買つて行く。中には食べ食べ歩いて行く人もある。かみさんは又いもを切つたり、釜にのせたり、火をたいたり大變にいそがしい。

### 寫生

長野縣鳥居小學校尋四

早川 忠治

私どもは、つがね先生から、今度の日曜日までにどこでもよいらか寫生をしてこいといひつかつた。

私は火曜日の日に、丸山と二人で體操場の裏で寫生をしようとした。初私はどこをかくこうかと思つて居ると、

八四

私が朝飯をすまして學校へ行かうと柏屋の前を通ると、わらじをはいたざいの人が店の前に立ちどまりました。でつちはうれしさうに「おまりなつしよく／＼と頭をべ／＼してゐます。その人は店へすつとはいいつて、おらがあの八つになるわらしが着るんだがら何か見せてくなんしよ」と言ひました。でつちはおくの方からけんろくの着物を出して見せると、「これはなんぼだん」と着物をひつくりかへしながら聞く、「それは…………」後の方がひくく聴えませんでした、そしたら、「そんじやあんまり高やあからこの後に買ふべ」と急いで行つてしまつた。でつちはずかりしたやうな様子でそろばんをいゝちつてた。

### やさしいや

茨城縣筑波郡小峯村一四

大山 忠雄

五助さん等が向山をかけたといつたので向山をかきはじめたが、へただつたら、向山をかゝらないで、今度は正見寺を歩いてゐると、友たちが大ぜい來て見せる見せるといつてささいでゐるから、私はとう／＼かくのをやめてしまつた。

### お使のかへり

大阪市船場小學校尋四

祭原 純子

お母さんのおいひついで、お手紙を吉村さんにおとどけて、かへつてくると、何んだか人だかりがして、ワイワイ言つてゐる。何んだらうと立よつてみたが、せが低くて見ることができぬ「なんや、何が何んやい。まぬけ」「まぬけとはなんや」「さうゆう聲が聞える。喧嘩らしい。聲は段々荒くなつて行く。そのうちに仲裁する人の聲も聞える。

うらしいおどけない好い詩です(牧水)

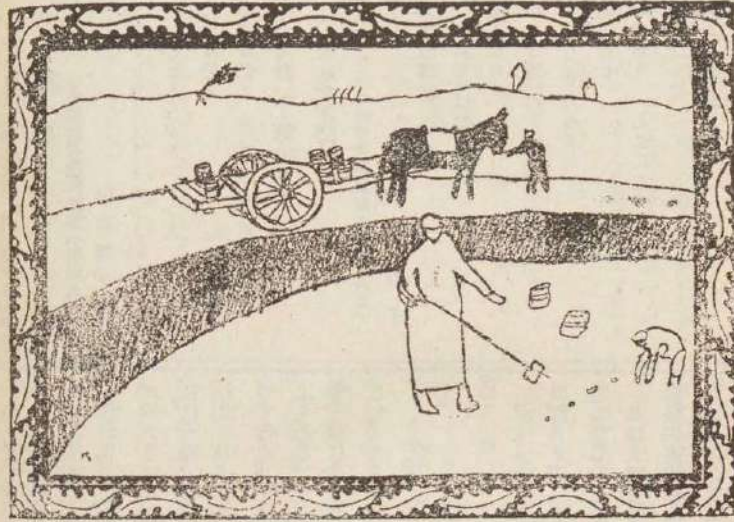
八五





介壯水清 四尋校學小通水清市吳 (賞)「景風」 畫由自

僕は大喜でおもはずうまいといった。  
二十分ばかりすると、ポーツといふ大きい汽車の汽笛がきこへた。その時弟はお母様あの汽車だ、あの汽車だといつてよろこんだ。その内にお母様さんが、宮下さんへ米をかへしておいでといった。僕は米をもつて家を出た、くらぶの前の橋まで行くと、向ふから人力車にのつた人が来る。見てみるとお父さんであつた。僕はニコニコ笑つた。お父さんも笑つた。出張なさる時はあたまの



與勝井櫻 四尋校學小村郷内繁葉千 (賞)「車馬と人」 畫由自

私は氣をとられて、しばらく見てゐたが はつと思つて、また歩き出した。横町まで来た時は、電燈がぼつとついた。私はむちゆうになつてかけ出した。

### 秋上の日

愛知縣高岡第三小學校尋四

長崎 祐三

僕たちの村の秋上は十日の日であつた。僕はその日、學校を三時間で上つてくるつもりで居つた。そうすると三時間目に雨がほろ／＼としたので、五時間やつてそうじだけ休ましてもらつて家へ歸つた。そのじぶんにはもう雨はやんでゐた。家へかへつて、ごはんをたべるとすぐに、義男君の家へ行つて遊んだ。まづ第一にばん／＼ことをした。初ははん分づつに分けてやつて居つたが、だん／＼と僕がまけてきたので、一しようけんめでやつたが、どうしてもまけて行くので、しまひにははり合がなくなつたので、今度は石けりを初めたがすぐにやめた。そのうちに義男君がはしごを持つてかどの方へ行つたので僕が「なにをするのだ」と聞くと、義男君は「すずめをつかまへるのだ」といつてはしごにのぼつてとよの合さへ手を入れてすの中をかきまはして居つた。それです

ちめの子でも居るのかと思つて見て居るうちに、だんだん寒くなつて来たので、義男君に「もう家へ行くから又あした學校へ行く時によんでつてくれ」といつて學校ですつた圓いかはらをころ／＼と道にころがしながら家へ走つていつた。

### 車の人

朝鮮大邱公立小學校尋四

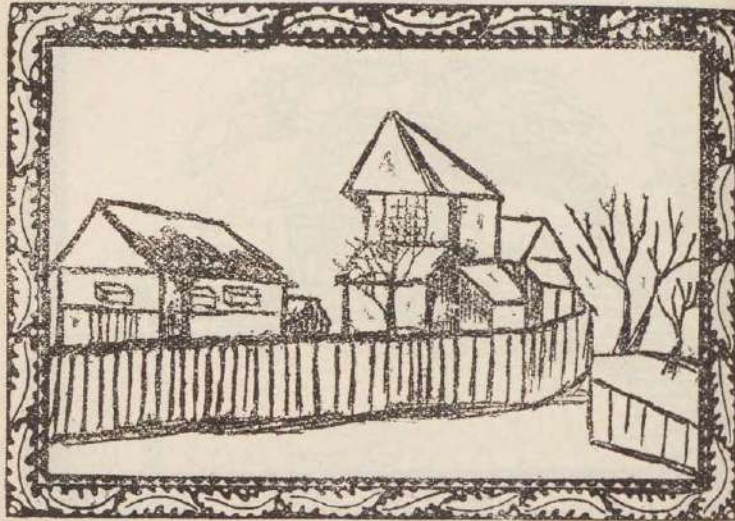
千田 清

昨日は紀元節であつた。學校の式がすんで内へ歸ると、お母様はニコ／＼顔で、僕にお父様から電報が来たよといつて電報を見せてくれた。讀むと

「十一ジヘルツク」

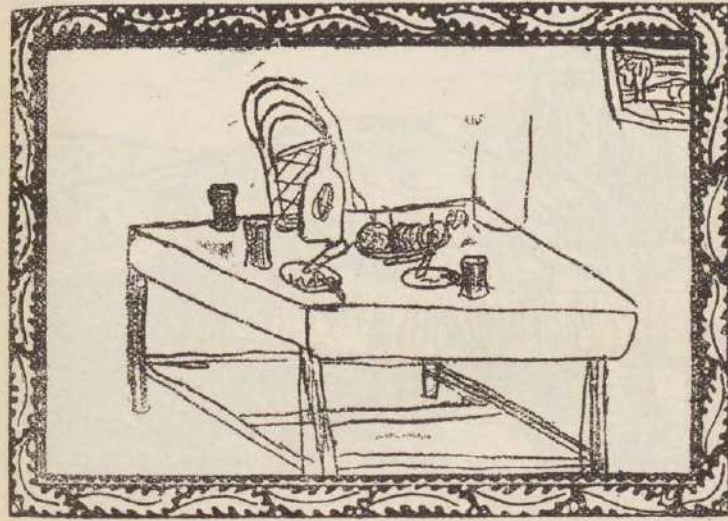
僕は大喜でおもはずうまいといった。





鄭次藤進 四尊校學小通水清市吳「家」畫由自

私が朝おきて見ると、ねえさんはぶんぶんとおこつて、はしもの下じきを出してゐた。わたしが行つてもものはいはない。わたしはお母さんの所へ行つて「お母さんなんせねえさんはあんなにおこつてをるだん」と聞くと「そんなことはしらん」と言つてをられた。そのうちねえさんがこちらへ来てわたしに「おいほしもの下じきを出さんか」と言つた。わたしは、たびをはいてから行くとしたのだ。ねえさんは「たびなんかはかんでもよいから早くおいで」と言つて、わたしをむりにひきずつて行つて、下じきの上へつゝ、からかいた。わたしはおそかつたので、「そんなら出す出す」と言つて、下じきを出しかけた。けれども、下じきにはしもが一ぱいかゝつてゐるので、手がつめたくてたまらない。うちのいきで手をあたゝめながらやるとねえさんは「おまいはよほどさむがりだねえ」と言つた。すこしたつと、お父さんが畑からかへつておいでになつて、わたしたちを見て「わしの畑へ行くときからやりかけてまだ下じきだけやう／＼ひろがつたとこか」と言つて、手つだつておくれたのですぐやれた。



(才八)人旅山若 九四一町鴨巢京東(藍)「卓食」畫由自

毛も長かつたが今はりつばなしんしになつてゐた。

鳥をうちにいつたこと

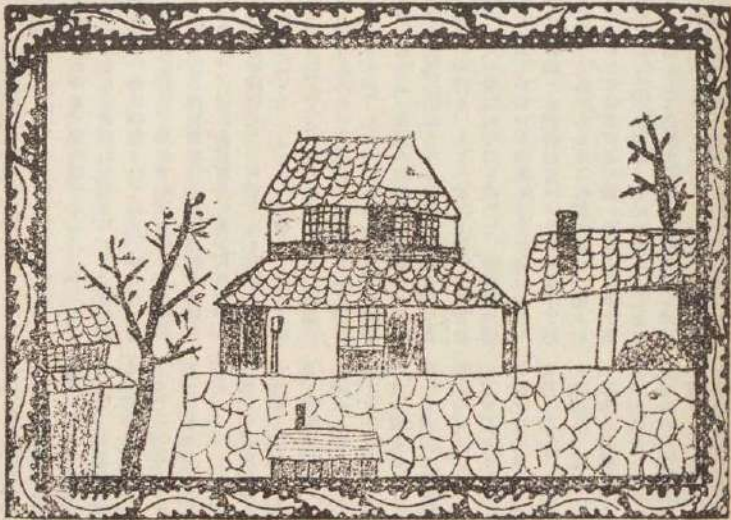
山口縣柳井小學校尋三  
村岡稔 夫

きのふは日曜でしたから、朝したくをして、おとうさんと山に鳥をうちに行きました。かたの山にのほつた時、からすがたくさん松の木にとまつてゐたので、おとうさんが、てつばうをむけると、みんなとんでゐつてどこへ行つたのかわからなくなりました。こんどは谷の方へ下りると、小さな杉の木に、しぎがたくさんゐました。そこではしぎを一羽うちました。それから西の谷へ行きましたが一羽もとれませんでした。それでもう一つのをやめて、「こと石山」にのほりました。のほるとちゆうでおひるごろになつたので、岩の所に火をたいておもちをやいてたべました。のほつて見ると、前は海で右の方に町が見えました。僕の家は山にかくれて見えませんでした。少しして山を下りました。下る時かねをほる所を見ました。僕はきのふ初めて「こと石山」にのほつたのです。

叔ほし

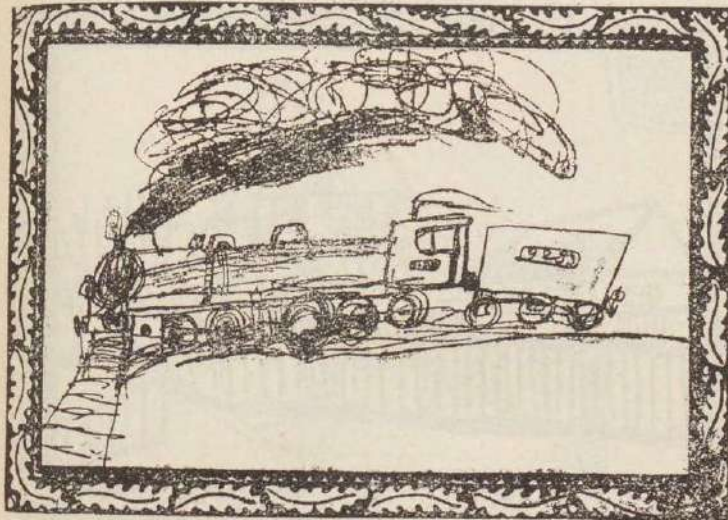
愛知縣高岡第三小學校尋四





雄道山森 三尋校學小井柳縣口山「生家の家」 畫由自

す。どん／＼お描きなさい。  
 ▲佐藤庄博君の寫生も良い畫です。けれども、やつぱりうすい鉛筆で描いてあるので駄目なんです。  
 ▲廣島の石黒信君、酒井君、具島君、進藤君等の畫も良いです。けれども、入選した二つが版にして良い結果になるので、それが選ばれました。版にして良い結果になるのはくりかへしいふはつきり描いたものゝ事です。  
 ▲次號に版と畫との關係をくはしくお話しませう。  
 ▲若山族人さんのは皆良い畫でした。あなたの鉛筆も、うす／＼ぎます。お父さんにチョーク鉛筆を買つておもらひなさい。文房堂で買つて居ります。  
 ▲雜誌に出た畫でも、出ない畫でも山本先生が「良い畫だな」と思つた畫は、とつておいて其内に展覽會をやらませう。だから雜誌に出ない人でも、熱心に描いてどし／＼送つて下さい。(をばり)  
 ▼自由書展覽會の趣旨書より(東京に於て開かれたる)  
 「たいへんのび／＼した繪を描く子供も、學校へ通ひ出すと、きまつていぢけた繪を描くやうになる。」  
 「子供には教へなければ畫は描けまい、と思ふのは大間違ひだ、自然はいつても色と形と濃淡で彼れ等に示されてゐるではないか、それが彼等にとつても、大人にとつても、唯一のお手本なのだ。それらのものが直覺的に、察覺的に或は又幻想的に自由に描かるべきである。教師の任務はたゞ生徒らを此自由の活動にまぎて、引き出す」事だ。」  
 「少くとも國定のお手本の、安つばい印刷物から、變つて常に生き／＼としてゐる、「自然」へ代へられねばならない。」



(才六) 夫英野長 寺目高村並松郡摩多豐下府京東「車汽」 畫由自

▲今度はずいぶん澤山集りました。そして良い畫もかなりありました。が、残念な事には、鉛筆の線がたいへん淡かつたり、色鉛筆でうすぼんやり描いてあつたりして、版にして雜誌へ印刷しても無駄なものが多かつた事です。  
 ▲寫真に撮して版に作つて印刷した上で鮮り見えるものでないと困るのです。ですから濃くかける鉛筆か、チョークか、墨汁かではつきりと描いたのを送つて下さい。  
 ▲松本市の川久保君の「冬の景色」といふ鉛筆畫などはずいぶん良い畫でしたが、あれを寫真銅版にして雜誌へ刷ると見えなくなつてしまふのです。最も極上等な紙へ刷ればそんな事はないのですが、雜誌の紙では駄目なのです。川久保君の畫は皆良い畫で



信 通

第四回應募自由畫評

山 本 鼎



瓜の舟について

西條 八十

「瓜の舟」の作者、安藤華子さんは、今年やつと廿一になられた静かな娘さんです。當時新しい詩を一心に研究されてゐて、時々私の處へも作品を持って見えます。安藤さんが秘蔵してゐられる赤い表紙の小形な三冊の特集があります。いづれもご自分で書かれた詩をへんで綺麗に淨書して、可愛らしく装綴した本で、表紙には「Red Penna」と書いて在ります。私は今度の「瓜の舟」をその第三冊目の詩集の中で残りました。夜、お母さんから聞いた「フェーヤリ、テールズ」の中の「女王を載せた青い船」を、流麗の河端で思ひだして、その夢の實現を今か／＼と胸躍らせて待つてゐる兄妹の心持と、そこへプカリ浮いてきた甜瓜が二人の童話的な幻を破つて、同時に田園的な懐かしい匂いを微風のやうに流しこめる。上品で自然な喜劇的效果がある程度まで巧みに興へられてゐるやうに思ひます。箇々の言葉づかひには多少まだ稚い處はありますが、總體に於て近頃無い、厭味の無い、品位のある童話として推奨するに躊躇しません。

口應、童話を讀み、児童の讀物は併し、今は兎も角も、日本の童話童話が愈々な進歩をとり、藝術の世界へまで向上する事が出来ました。立派に藝術を持った作家達が何れも競ふて此の方面に努力するといふ有様ですから、やがて日本の兒童文學に面白い時代が来るだらうと思ひます。この事は今度集つた童話だらうと思ひます。十分知る事が出来ました。

併し、今は兎も角も、日本の童話童話が愈々な進歩をとり、藝術の世界へまで向上する事が出来ました。立派に藝術を持った作家達が何れも競ふて此の方面に努力するといふ有様ですから、やがて日本の兒童文學に面白い時代が来るだらうと思ひます。この事は今度集つた童話だらうと思ひます。十分知る事が出来ました。

併し、今は兎も角も、日本の童話童話が愈々な進歩をとり、藝術の世界へまで向上する事が出来ました。立派に藝術を持った作家達が何れも競ふて此の方面に努力するといふ有様ですから、やがて日本の兒童文學に面白い時代が来るだらうと思ひます。この事は今度集つた童話だらうと思ひます。十分知る事が出来ました。

つてゐると思ふのです。たゞ表現だけを極めて単純にさへすれば、藝術的には少しも落してかゝる必要はないと思ふのです。それが證據には、世界童話文學の寶石と譽はれてゐるアンデルセンやグリムなどの作品を讀んでご覧なさい。藝術品として程度を少しも落してゐません。それとて立派に子供の讀物となつてゐるのです。此事を童話を作らうとする方途に考へて頂き度く思ひます。(記者)

◆綴方佳作 △犬の子をもらひに行く文 (京城 福田福造) △かきたる會 (福島 松田良隆) △おつかひのほうび (朝鮮 竹中正男) △けさの寒さ (同 牧原龍逸) △手紙 (佐橋登美子) △昨日の一日 (大阪 前田秀雄) △さうかちちやう (岡山 林富) △夕方 (山口 岸井文雄) △汽車のとまつたこと (同 米岡花子) △象 (同 梅木杉市) △とり (同 津田文枝) △學校から歸つて (同 藤元スミ) △おばさんの家へ行つて (同 朝岡キミエ) △無線電筒 (朝鮮 向阪島) △綴方に (同 市川澄子) △ほらば (同 福島 澤井久子) △兄さんの手紙 (同 今泉ツツ) △どうかき (愛知 佐藤八十一) △隣のあかんぼう (同 石田新一郎) △亡きお姉様の思い出 (鹿児島 黒木清子) △火事 (札幌 藤野一郎) △冬の朝 (愛知鈴木時雄) △冬のある日 (兵

庫 聖北正次 △手紙 (金澤 高島光雄) △かなし別れ (金澤 吉田壽子) △家の船 (北海道 山本タケ) △隣の犬 (同 高橋政治) △私の好きな鳥 (同 吉田清枝) △冬の夜 (東京 増井善次郎) △靖國神社の祭 (東京 中村富久) △半鐘の音 (埼玉 古山敏彦) △秋の夕方 (札幌 橋本穂) △かんしんな犬 (岡山 小橋幹子) △私の妹 (愛媛 世良八重子) △けんくわ (朝鮮 西原啓) △がらすをわつた (同 福田進徳) △赤い衣 (関根百合子) △夢 (矢島富美子) △綴方と僕 (山口 香藤政雄) △海岸の夕 (長野 日比野光雄) △お湯 (岡山 妹尾輝子) △一日 (東京 山崎千賀子) △うれしいこと (東京 豊永祐)

併し、今は兎も角も、日本の童話童話が愈々な進歩をとり、藝術の世界へまで向上する事が出来ました。立派に藝術を持った作家達が何れも競ふて此の方面に努力するといふ有様ですから、やがて日本の兒童文學に面白い時代が来るだらうと思ひます。この事は今度集つた童話だらうと思ひます。十分知る事が出来ました。



# 本誌主催「青い鳥」劇の二日間

二月十四日(土曜日)——

「金の船」主催お伽大會の第一日目です。春めいた、暖かな日で、金の船の藝興行を祝福してくれる様なよい日でした。この日、十一時頃には、もうぞくぞくと「青い鳥」劇を見ようといふ人達が、有楽座の前へ集つて参りました。そして、正午近くには大變な混雑になつてゐました。可愛い、本誌の讀者諸君をはじめ、種々雑多な人達が、待ち切れない様にこの名劇を見ようと待つてゐるのでした。

やがて、定刻の十二時になりました。劇場の扉は開かれましたが、一と切りは非常な騒ぎで、本誌の「お伽大會係り」の者は勿論の事、平生なれてゐる案内人までが、手のつけ様がなく、まごついてゐるのでした。

程なく、劇場の廊下では開幕のベルが鳴りました。その頃にはもう、観客席はぎつしりとなつてゐました。

第一幕の「惟夫の家」から始つて、最場の「目ざめ」まで、凡そ五時間餘りもかゝりましたが、幕の終る處ごとに、見物の人たちは、日本で初めて演ぜられた、この大仕掛けな童話劇に驚いたり、喜んだりして居られました。

岡本先生の描かれた背景の立派な事、主人公の「チルチル

と「ミチル」の實に巧かつた事、複雑な光線が相當に巧みに使つた事、——それは日本の芝居はじまつて以來の出来であつたさうで、見物の人々の賞讃された事は勿論の事、各新聞までが何れも、筆をそろへて賞讃してくれました。

二月十五日(日曜日)——

この日は大雪でした。それにも拘らず、大變な來會者で、劇場の扉を開いた時には、潮のなだれ込む様にどつと見物の人たちが押しよせて來られました。全く、その混雑つたらありませんでした。見る間に座席は一ぱいになつて了ひ、止むを得ず、入場者をお断りするといふ様な事になりました。

この日は、本誌の山本鼎先生をはじめ、前田晃先生や、吉田絃二郎先生や、窪田空穂先生や、小林愛雄先生や、その他の諸先生方も、雪の中を來て下さいました。

第五幕目の「墓地」の場では、チルチルとミチルへ、本誌から花輪を贈りましたが、二人は大變な喝采をうけました。そして、全部を演じ終つた頃は、夕暮れ頃でしたが、雪はずつかり霽れてゐました。來會者の方々は、何れも満足そうなお顔をしてお伽大會に歸つて行かれました。此の様に、本誌主催のお伽大會は大成功をもつて終る事が出来ました。最後に、地方からわざわざ、祝電や祝文を送つて下さつた讀者の方々に、厚くお禮を申し上げます。何れ今後ともこの様な催しをつゞけて、皆さんの御後援に願ひを積んで居ります(記者)

## △童話の選後に 野口雨情

九四

童話のれうちが、長し短しによつて、きめられるものではありません。いくら長くあつても、いくら短くあつても、よいものは、どこまでもよいものです。わるいものは、どこまでもわるいものです。

みなさんのうちに、長きさへあれば、よいものやうに考へてゐる方があつたら、それは大變な間違ひであります。一聯でも半聯でもどんなに短くとも、れうちにかかまはりはありません。それから、事柄によつて童話になる事柄と、ならない事柄との見分けが大切です。童話の領分でない事柄を、童話にしようとはせずと餘計に骨が折れます。また、骨を折つて作つた所が、よい童話になりつこはありません。いつも云ふ通り、童話の領分は、ほんとうに誇らないと思ふほど、なんでもない所にあるのであります。

今回のでは、坂田露香君の「蟻地獄」は、くどくない、新しいところに、大層注意を惹きました。くどくないと云ふことは、童話のれうちの上に、最も大切な一つであります。(一)

▽「蟻地獄」は野日先生の推賞がありましたから、次號の本文に掲げる事にいたしました。記者

△應募童話に就て

本月の締切りに集つた童話は左の二十三篇です。  
○青い硝子月の部屋(深澤あきと)○春の日(磯枝夢)○富ちゃん(乾定二郎)○スナツツ(高北龍雄)○春の歌(越野太郎)  
○天女の鳥(小野逸)○お月様と克(石川正夫)○星の家(露藤葉果)○ひよりの鳥(大和左止男)○黄金の果(泉守特四郎)○紫

鳥(桂昌郎)○後夫さん(中村みわ子)○おととと(乾定二郎)○百合首の囀(文島英三)○五色の絲(杉平利)○童話(中村横子)○三正の羊(高橋茂)○小さな笛吹(瑞崎島)○静ちゃん(木内茂樹)○黄金鳥(小園絃星)○胡蝶の翅(野島増夫)○雀の卵(露藤葉果) (向この外に有馬先生宛に來た作が一篇ありますが、此の方は同先生の方へ行つてゐるので、内容がわかりませんから次號に廻します) 以上の諸作を厳密に選した結果、次の一篇を選ぶ事が出来ました。推賞して次號に掲載する事にいたします。

雲霧 葉果 作

雲霧の家(向)

佳作として挙げます。(記者)

ひよりの鳥(大和左止男) 百全吉の囀(元島英三)

俊夫さんと硝子(田中みわ子) 紫藤鳥(桂 兎那)

△自由展覧會

こんど東京で初めて兒童の自由展覧會が開かれました。本誌の山本鼎先生と洋書家の長原孝太郎さんと彫刻家の石井鶴三さんの三人の方が、築められた自由園ばかりが神田の兜居で二月の十六日より廿九日迄展覧されました。

この催しは大變に注意をひきました。子供達の機な笑ひが持つて置をかまなければならぬといふ事を一層よく知らしめました。

△「世界童話寶石集」に就て 富田房の「機籠家庭文庫」はわが國で出來た童話集としては最も立派なもので、その名の通り實際に機籠的なものです。世界童話寶石集は此文庫の續篇として、楠山正雄氏と岡本節一氏の熱心な努力によつて出來たものです。何れ次號で詳しく紹介いたします。

九五



### 子供の自由畫を募る

山本 鼎

子供諸君、——こんど、この雑誌で君たちの畫をいたゞいて、僕が、みんなの畫のうちから、選ぶだのを、毎月六つづつらる此處に、寫眞の版にして出すことになりました。

自由畫、といふのは、お手本や、雑誌の畫なんかを見て、描いたものでない畫のことです。君たちが、かつてに描いた畫のことです。ですから、君たちはお手本や、雑誌の畫なんかをみて描かずに花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顔なり、なんでも、君たちの好きなものを、かつてに描いてごらん下さい。

お手本を見て描いたり、雑誌の畫なんかみて描いたものは、みんな落第ですよ。それから、あんまり、うすく、ほんやりかいてある畫は、たいそういゝ畫でも寫眞の版になりませぬから、及第しても雑誌へは出されません。そのかはりさんないゝ畫は僕が戴いてだいじにしまつておきます。

大人諸君、——以上の企を御賛成下さいまし。子供達は、本来、お手本を真似するよりも、自由に、見る所のもの、もしくは見たことのあるものを、描き度がるものです。さういふ子供には、出来るだけ、良質の畫用品を與へて下さいまし。そして、子供を愛すると同じ愛を以て、彼れの創作を迎へて下さいまし。大人に、智、感、情がある如く、小供にも智、感、情があります。大人に美術がある如く子供にも美術がある筈です。子供の美術は彼れの眼と手によつて自然から直接に捉へられた、そのものです。

### ◎童話童謡募集

吾々はかくれたる童話、童謡作家を紹介したいが爲めに、毎月童話、童謡を募集いたします。題材は勿論作家の自由ですが、内容形式は共に従來の型を被つた、眞に藝術的な作品を求めます。

### ◎金の船誌友募集

「金の船」の誌友を募集いたします。誌友になれば、いろ／＼の便宜や特典がございます。誌友規則を知りたい方は編輯所宛にお申込み下さい。すぐお知らせいたします。

□編輯所は移轉しました□  
東京府下田端三百五十一番地へ

### □少年少女の創作募集□

(原稿は東京府下田端三五一番地) (金の船編輯所へ送つて下さい)

自由畫 山本 鼎 先生選

自由畫のことは、山本鼎先生が、前頁に書いて下さつたから、ごらん下さい。

綴方 編輯部選

綴方は、みなさんが、見たこと、思つたことを、そのまゝ、みだん遣つてゐる言葉で書いて下さい。

幼年詩 若山 水 先生選

幼年詩は山なり森なり花なり何でも見たり、感じたりしたことを、みなさんの好きなやうに、詩にして下さい。

自由畫はなるべく、半紙位の畫用紙に書いて下さい。

綴方、幼年詩は用紙も字數も、みなさんの自由です。しかし、解りやすい様に墨かインクで書いて下さい。

住所、姓名、年齢などは落さないやうに、學校へ行つてゐる方は學校名と學級を、ちやんと書いて下さい。

人のものを真似たり雑誌や讀本や綴方の手本など見て書いたのはいけません。

□よく出来たのは、雑誌にのせます、中でも優れたのには賞品をさしあげます。

- 定價一冊 貳拾五錢 送料壹錢
- 三ヶ月分三冊(送料共) 七拾五錢
- 半年分六冊(送料共) 壹圓五拾錢
- 壹少年分十冊(送料共) 貳圓九拾錢

廣告料は御照會次第お答えいたします

▽御注文は必ず前金で御拂込下さい  
▽送金は小爲替でも切手代用でも宜敷  
▽切手代用は(壹錢切手)一割増に願ひます  
▽御注文の場合は筆何巻何號よりと云ふことを明瞭に書いて下さい  
▽住所姓名は丁寧に分りよく御書きください

大正九年三月十四日印刷(本) 毎月一回  
大正九年四月一日發行(行) 一日發行

編輯人 齋藤 佐次郎  
發行所 東京府下田端三百五十一番地  
發行所 東京府下田端三百五十一番地  
印刷所 高橋 郁  
印刷所 三協印刷株式會社  
發行所 東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地  
發行所 キンノツソ社



大正八年十月十六日 大正九年三月十四日印 四冊  
第三種郵便物認可 大正九年四月一日發行(毎月一日發行)

# 繪雜誌界の權威

## 日本の子供

定價冊貳拾錢送料五厘  
半年分送料共壹圓拾五錢  
壹年分送料共貳圓貳拾錢

帝國劇場付畫家執筆

上品でうつくしい繪

面白くて爲になる話

每號新工夫の大附録

最良の幼年向繪雜誌

## ナカヨシ

定價冊拾貳錢送料五厘  
半年分六冊送料共七拾錢  
壹年分送料共壹圓參拾錢



東京市麹町九段下

キンノツノ社發行

振替東京參〇五七貳

行發社ノツノキ 京東

(定價貳拾五錢)